



文化財愛護シンボルマーク

京都府京田辺市

## 堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ

—薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

2006

京田辺市教育委員会

京都府京田辺市

## 堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ

—薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

2006

京田辺市教育委員会



堀切1号墳石室全景（南東から）

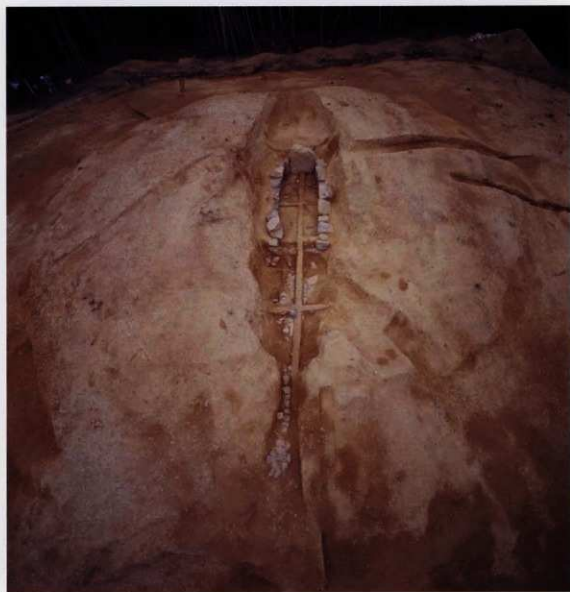


堀切古墳群遠景（北東から） 左後方の山が甘南備山



堀切1号墳遠景（西から） 斜め上方に新遺跡を望む





掘切1号墳全景（南東から）



堀切1号墳出土ガラス玉類



堀切1号墳出土土器

## 序

京田辺市の中央部、薪の丘陵地には、古墳時代後期の古墳群が数多く存在することが知られています。今回報告する堀切古墳群もそのひとつで、丘陵の上には横穴式石室墳が、同じ丘陵の斜面には横穴が造られるという市内でもまれな存在となっています。

これまでに行われた調査で、横穴から竜山石製の組合式家形石棺が見つかったり、横穴式石室墳の周溝から顔面に文身紋様のある人物埴輪が見つかるなど注目される古墳群です。

調査により、古くから知られている1号墳は、横穴式石室の石材がほとんど残っていないものと考えられていましたが、大方の予想に反し、玄室部分では石材が残っていたこと、凝灰岩製の家形石棺が使われていたことなど一定の成果を得ることができました。これにより、京田辺市の古代史にまた新しい資料が加わったこととなります。

最後になりましたが、今回の調査にあたりまして、事業関係の方々、関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導を賜りました。あらためてお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財へのご理解を賜りますようお願い申しあげます。

平成18年6月

京田辺市教育委員会

教育長 村田 新之昇

## 例 言

- 1 本書は、京都府京田辺市薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱで、既刊の『京都府田辺町堀切古墳群調査報告書』田辺町教育委員会 1989の続編である。
- 2 現地調査及び整理報告は、京田辺市教育委員会、株式会社信和住宅、安西工業株式会社の三者で覚書を締結して実施した。
- 3 現地調査は平成17年5月27日に開始し、同年10月28日に終了した。
- 4 調査組織は次のとおりである。

調査主体……京田辺市教育委員会  
調査指導機関……京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会  
調査担当者……京田辺市教育委員会 教育部 社会教育課 鷹野 一郎  
安西工業株式会社 調査部 委託調査技師 島 軒 満  
発掘調査作業……安西工業株式会社
- 5 調査を実施するにあたり、土地所有者の株式会社信和住宅には多大なる御協力と御支援を賜った。記して感謝の意を表します。
- 6 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々からご教示を賜った。記して感謝の意とします（順不同・所属敬称略）。

高橋美久二・辰巳和弘・平良泰久・肥後弘幸・森 正・橋本清一・石井清司・奈良康正  
森下 衛・森下浩行・三好美穂・池田裕英・鐘方正樹・原田香織・柴 暁彦・内田奈美子  
中島 正・小泉裕司・浜中邦弘・大洞真白・内田真雄・後藤完二・田中一廣・西村匡宏
- 7 本書で使用した遺跡の名称及び古墳番号（何号墳）は、『京都府田辺町遺跡地図』（田辺町教育委員会 1995）及び『京都府遺跡地図』（第3版）京都府教育委員会 2003に従った。なお、堀切横穴群の名称については、『京都府田辺町遺跡地図』（前掲）に従った。
- 8 遺跡および遺構の位置は世界測地座標系により示した。標高は海拔標高（T.P）である。本書第2図で使用した地図は、国土地理院発行地形図（1：25,000）「田辺」・「枚方」・「宇治」・「奈良」を編集して使用した。
- 9 出土遺物及び図面・写真等一切の記録類は、京田辺市教育委員会が保管している。
- 10 出土遺物のうち、馬具・武器等の金属製品については、保存処理作業を行った。
- 11 本書の執筆は、1. はじめに、4. 調査経過（1）を鷹野が、他を島軒が分担して行い、附篇、堀切1号墳横穴式石室の石材材質については、京都府立山城郷土資料館 橋本清一氏に報文を賜った。本書の編集は、鷹野の指導・助言のもと、主に島軒が行った。

# 本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 堀切古墳群の古墳分布と既往の調査	
(1) 堀切古墳群の古墳分布	5
(2) 既往の調査	5
4. 調査経過	
(1) 平成16年度調査(試掘調査)	8
(2) 平成17年度調査(本調査)	10
5. 堀切1号墳	
(1) 調査前の墳丘	14
(2) 墳丘	14
(3) 盛土	18
(4) 墳丘内で検出した遺構	18
(5) 埋葬施設	22
(6) 出土遺物	40
(7) 築造時期	48
6. 堀切2号墳	54
7. 堀切11号墳	
(1) 墳丘	55
(2) 盛土	55
(3) 埋葬施設	57
(4) 出土遺物	58
(5) 築造時期	60
8. 第2調査区	62
9. まとめ	64

附篇 堀切1号墳横穴式石室の石材材質

京都府立山城郷土資料館 橋本清一 74

## 挿 図 目 次

巻頭図版 1	堀切 1 号墳石室全景	第21図	1 号墳石室石材材質鑑定 作業風景……………13
巻頭図版 2 上	堀切古墳群遠景	第22図	11号墳石室内作業風景……………13
巻頭図版 2 下	堀切 1 号墳遠景	第23図	現地説明会風景……………13
巻頭図版 3	堀切 1 号墳全景	第24図	1 号墳調査前風景……………14
巻頭図版 4 上	堀切 1 号墳出土ガラス玉類	第25図	1・2 号墳調査前風景……………14
巻頭図版 4 下	堀切 1 号墳出土土器	第26図	1 号墳墳丘測量図……………15
第 1 図	調査地位位置図…………… 1	第27図	1 号墳周溝土層断面図……………16
第 2 図	主要遺跡図…………… 3	第28図	1 号墳周溝土層断面……………16
第 3 図	堀切古墳群の古墳・横穴分布図… 5	第29図	周溝内遺物出土状況①……………16
第 4 図	堀切 6 号横穴組合式家形石棺 出土状況…………… 6	第30図	1 号墳墳丘全景①……………17
第 5 図	7 号墳出土人物埴輪①…………… 6	第31図	1 号墳墳丘全景②……………17
第 6 図	7 号墳出土人物埴輪②…………… 6	第32図	1 号墳墳丘土層断面図……………19
第 7 図	9 号墳玄室床面…………… 7	第33図	1 号墳墳丘土層断面東半部……………19
第 8 図	堀切 7・8・9・10号横穴全景………… 7	第34図	1 号墳墳丘土層断面西半部……………19
第 9 図	堀切 4・7・9 号墳出土遺物………… 7	第35図	SK01実測図……………20
第10図	1 号墳試掘調査後全景…………… 8	第36図	SX02実測図……………20
第11図	調査区位置図・開発計画線…………… 9	第37図	SK03検出状況……………20
第12図	1 号墳樹木伐採作業風景……………10	第38図	SK03実測図……………20
第13図	4Tr付近崖面精査後……………10	第39図	1 号墳周溝完掘状況……………21
第14図	5Tr全景……………10	第40図	1 号墳墳丘北側裾部……………21
第15図	1・2・11号墳現況測量図……………11	第41図	1 号墳周溝内遺物出土状況②……………21
第16図	1 号墳表土掘削作業風景……………13	第42図	SK01検出状況……………21
第17図	1 号墳石室調査前状況……………13	第43図	SX02完掘状況……………21
第18図	1 号墳周溝掘削作業風景……………13	第44図	1 号墳玄室側壁目地の 灰白色粘土……………22
第19図	1 号墳石室内掘削作業風景……………13	第45図	1 号墳石室実測図……………23~24
第20図	1 号墳石室内中世面作業風景……………13	第46図	1 号墳玄室内大型石材崩落状況……………25

第47図	1号墳玄室左側壁石材検出状況…25	第71図	1号墳墓道掘削作業風景…38
第48図	1号墳石室検出状況…27	第72図	1号墳玄室内SX04検出面平面図…39
第49図	1号墳玄室敷石検出状況①…28	第73図	SX04実測図…39
第50図	1号墳玄室敷石検出状況②…28	第74図	SX04検出状況…39
第51図	1号墳石室排水溝蓋石除去後…28	第75図	SX04銭貨出土状況…39
第52図	1号墳玄室右側壁…29	第76図	1号墳出土土器実測図①…40
第53図	1号墳玄室左側壁…29	第77図	1号墳出土土器実測図②…41
第54図	1号墳玄室敷石・置土除去後…29	第78図	1号墳出土土器実測図③…42
第55図	1号墳石室掘り方・土層断面図…30	第79図	1号墳出土土器実測図④…43
第56図	1号墳奥壁裏込め状況…31	第80図	1号墳出土土器実測図⑤…44
第57図	1号墳石室内流入土…31	第81図	1号墳出土馬具実測図…45
第58図	1号墳石室内セクション 設定状況…31	第82図	1号墳出土武器・金属製品 実測図…47
第59図	1号墳墓道内土層断面…32	第83図	1号墳出土ガラス玉実測図…47
第60図	1号墳石室掘り方検出状況…32	第84図	古墳再利用時の土器実測図…48
第61図	1号墳出土組合式家形石棺 鑿状工具痕拓影…33	第85図	SX04出土銭貨拓影…48
第62図	1号墳出土組合式家形石棺 実測図…33	第86図	1号墳出土土器①…49
第63図	1号墳石室内遺物出土状況 平面図…35	第87図	1号墳出土土器②…50
第64図	1号墳石室・墓道内遺物出土状況 平面図…36	第88図	1号墳出土土器③…51
第65図	1号墳玄室内遺物出土状況…37	第89図	1号墳出土馬具・金属製品…52
第66図	1号墳玄室左側壁部遺物 出土状況…37	第90図	1号墳出土ガラス玉・組合式 家形石棺・銭貨等…53
第67図	1号墳玄室右袖部遺物出土状況…37	第91図	2号墳全景…54
第68図	1号墳玄室奥壁部鉄鏃出土状況…37	第92図	11号墳調査前風景①…55
第69図	1号墳羨道部遺物出土状況…37	第93図	11号墳調査前風景②…55
第70図	1号墳墓道内高杆蓋出土状況…38	第94図	11号墳墳丘測量図…56
		第95図	11号墳石室内土層断面図…56
		第96図	11号墳墳丘土層断面図…57
		第97図	11号墳全景…59
		第98図	11号墳石室内土層断面…59

第99図	11号墳周溝土層断面	59	附篇第1図	堀切1号墳横穴式石室の 岩石名分布図	75
第100図	11号墳石室玄室掘り方検出状況	59	附篇第2図	堀切1号墳横穴式石室 壁体石	76
第101図	11号墳玄室内陶棺出土状況	59	附篇第3図	堀切1号墳横穴式石室の 玄室の礎床の礎	77
第102図	11号墳出土土師質亀甲形陶棺 実測図	60	附篇第4図	手原川と舞ヶ辻川合流地点 現河床礎	78
第103図	11号墳出土土師質亀甲形陶棺	61	附篇第5図	古墳の石材の採取地域の 推定図	79
第104図	陶棺推定復元案	61			
第105図	第2調査区実測図	62			
第106図	第2調査区全景①	63			
第107図	第2調査区全景②	63			
第108図	堀切古墳群・横穴群主要出土 遺物	67			

## 表 目 次

表1	堀切古墳群一覽	4	表2	堀切古墳群の諸要素一覽	69
----	---------	---	----	-------------	----



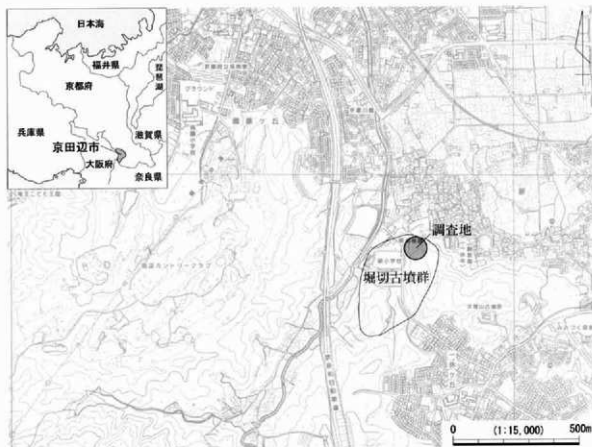
## 1 はじめに

堀切古墳群は、京都府京田辺市薪堀切谷・大欠他に位置する古墳時代後期の古墳群である。近年の宅地開発は市内丘陵部を中心に進行しつつあり、当古墳群の位置する薪地区においても宅地開発計画が持ち上がった。開発区域は、薪小学校東縁の市道長尾谷・大欠線を挟んだ東側丘陵地帯で、開発区域内には周知の堀切1・2号墳や1・2号横穴が位置することから、京田辺市教育委員会では、平成16年11月に当該地区の試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、周知の1・2号墳以外にも、未知の古墳等の存在が予想されたため、平成17年度に当該地区を含めた約2000㎡の発掘調査を実施することと決定した。

発掘調査は平成17年5月27日から開始して、同年10月28日に終了した。調査の結果、横穴式石室を有する古墳時代後期後半の円墳2基（1・11号墳）を検出し、このうちの1号墳から、馬具・鉄製品・ガラス玉・土器類等の豊富な副葬品をはじめ、南山城では初となる二上山白色凝灰岩製の組合式家形石棺が出土する等、多大な成果を得た。

なお、土地所有者の株式会社信和住宅の方々をはじめ、関係機関・地元住民の方々、また、雨天・酷暑の中において作業に従事された皆さん、その他多くの方々のご協力によって調査を実施することができた。記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査地位置図

## 2 位置と環境

堀切古墳群の位置する京田辺市は、京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央部、伊賀山中に源を発する木津川左岸に位置し、北は京都府八幡市、東は木津川を挟んで城陽市・井手町、南は相楽郡精華町、西は大阪府枚方市、奈良県生駒市に接している。市西部は生駒山系に連なる丘陵地帯で、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がっている。軟弱な大阪層群からなる市西部の丘陵地帯は起伏が著しく、丘陵から東の木津川に流れ込む多くの小河川によって開析谷・扇状地が形成されている。また、その小河川の大半は、東の平野部で天井川化しており、市の景観は独特の様相を呈している。

堀切古墳群は、生駒山系から連なる甘南備山（標高217.5m）山麓から北東方向に延びる丘陵上に立地しており、丘陵上からは、木津川の支流である手原川や同河川の形成した扇状地上に立地する薪集落、東に木津川や対岸の丘陵地帯、北には遠く京都市街や比叡山塊まで見渡せるなど、絶好の眺望を得ることができる。

堀切古墳群の立地する京田辺市薪は、面積に対して山地の占める割合が高く、平安時代には石清水八幡宮の神事用の薪を納める荘園として、薪御園あるいは薪荘等と呼ばれ、鎌倉時代の嘉禎元年（1235）以降には、近隣の興福寺領大住荘との間で用水等を巡る熾烈な争いが展開され、天下の耳目を集めた地域としても知られている<sup>1)</sup>。

薪最古の遺跡としては、近年の調査で、縄紋時代中期末の縦穴住居跡等が発見された薪遺跡があり、薪の人々の営みが縄紋時代中期まで遡ることが明らかとなった<sup>2)</sup>。続く弥生時代の遺構は明確でないが、薪遺跡北西丘陵上に弥生時代中期の狼谷遺跡が知られ、また堀切古墳群の立地する丘陵上からも当概期の土器が少量ながら出土している。

古墳時代になると、南山城地域では、30数面の三角縁神獸鏡が出土した古墳時代前期初頭の山城町榊井大塚山古墳（前方後円墳、全長175m）の築造を嚆矢として、本格的な古墳造営が開始される。市域における古墳の様相は、まず薪南西の飯岡に、古墳時代前期後半の前方後円墳である飯岡車塚古墳（全長90m）、北西の大住に、前方後方墳の大住南塚古墳（全長71m）、同車塚古墳（前方後方墳、全長66m）がそれぞれ築造され、続いて飯岡に中期の大型円墳であるゴロゴロ山古墳（径約60m）が築造される。

薪では、古墳時代前期から中期にかけての古墳は少なく、古墳時代前期の郷土塚3号墳や、家形埴輪・鳥形埴輪・鉄鈴が出土した中期の郷土塚2号墳（円墳）、また同じく中期の古墳と思われる天理山1号墳等の他は、主に横穴式石室を内部主体とする後期古墳である。これには、堀切古墳群・郷土塚古墳群・小欠古墳群・畑山古墳群・西山古墳群があり、いずれも数基から10基程度の小規模な群集墳を形成している。このうち、当古墳群と郷土塚4号墳、畑山2・3号墳は発掘調査が実施されており、郷土塚4号墳（円墳、直径16m）では、横穴式石室内から鍛冶道具の鉄鉗・鉄槌が出土し、畑山2号墳では、横穴式石室内から凝灰岩片が、同3号墳で



- |              |               |            |            |            |            |
|--------------|---------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 堀切古墳群・横穴群 | 2. 西薮遺跡       | 3. 天理山古墳群  | 4. 小欠古墳群   | 5. 城ヶ前遺跡   | 6. 茂ヶ谷遺跡   |
| 7. 稲葉丹後谷古墳   | 8. 田辺城跡       | 9. 神奈備寺跡   | 10. 観音山古墳  | 11. 牛ノ宮古墳  | 12. 西山古墳群  |
| 13. 新道跡      | 14. 畑山古墳群     | 15. 大欠古墳   | 16. 狼谷遺跡   | 17. 郷土塚古墳群 | 18. 薮城跡    |
| 19. 資谷古墳群    | 20. 城山古墳群     | 21. 大住城跡   | 22. 内山古墳   | 23. 月談神社古墳 | 24. 上西野古墳  |
| 25. 立原地藏古墳   | 26. 大住南塚古墳    | 27. 大住車塚古墳 | 28. 影塚古墳   | 29. 西村遺跡   | 30. 相合遺跡   |
| 31. 門田遺跡     | 32. 本津川東岸河床遺跡 | 33. 魚田遺跡   | 34. 新田遺跡   | 35. 天神社古墳群 | 36. 松井横穴群  |
| 37. 荒坂横穴群    | 38. 女谷横穴群     | 39. 狐谷横穴群  | 40. 王塚古墳   | 41. 美濃山横穴群 | 42. 美濃山廃寺跡 |
| 43. 口种谷古墳群   | 44. 交野ヶ原塚跡群   | 45. 松井塚跡群  | 46. 虚空蔵谷遺跡 |            |            |

第2図 主要遺跡図

は銅碗がそれぞれ出土している。

古墳時代後期末になると、堀切古墳群と同一丘陵斜面に横穴群が築造される。京田辺市北西部から八幡市美濃山にかけての南北2km程の丘陵には、飯岡・松井・堀切・荒坂・女谷・美濃山・狐谷の総数200基を超えることが予想される横穴が分布しており、府内最大の横穴密集地帯となっている。この横穴を築造した人々に関しては、大住が古代「綴喜郡大住郷」に比定され華人が居住していたことが文献上明らかであることや<sup>3)</sup>、堀切7号墳から直弧紋風の刺青紋様をもつ人物埴輪(第6・7図)が出土していること等から、奈良時代にこの地に居住していた大隅華人との関連性が早くから指摘され、注目されているが、未だ考古学的確証を得るまでには至っていない。

続く奈良時代には、薪道跡において、奈良時代の掘立柱建物跡数棟が出土しており、役所的性格の建物の存在が予想されている。その他、堀切10号横穴からは銅製帯金具が出土しており、堀切横穴の被葬者像を考える上で興味深い。なお、現段階では、堀切古墳群及び横穴群を築造した人々の集落の発見には至っていないものの、苜米、薪道跡内で発見される可能性は高いと考えられる。

甘南備山は平安京建設の際、南の基準点になった山とされ、山頂には式内神南備神社が、東側谷部には「今昔物語集」にその名のみえる神奈備寺の跡が広がる。

中世には、薪道跡内で在地領主の居館に伴う園池を検出している。遺物は13世紀後半～14世紀前半を中心とし、多量の土師皿とともに白磁四耳壺、青磁盤等の優品も出土している。その他、園地南東に、室町時代の名僧一休宗純の退隠所で著名な名利願恩庵があり、東に延喜式内社棚倉孫神社が鎮座するなど、各時代にわたり盛んな土地利用が行なわれたことが明らかである。

古墳	墳形	規模	内部構造	石室主軸
1号墳	円墳	径22m	両袖式横穴式石室	S24° E 南南東
2号墳	自然地形			
3号墳	円墳		横穴式石室	
4号墳	円墳	径20m	横穴式石室	S18° E 南南東
5号墳	円墳		横穴式石室	
6号墳	円墳			
7号墳	円墳	径15m		
8号墳	(円墳)	径(16)m		
9号墳	円墳	径(20)m	両袖式?横穴式石室	南西
10号墳	円墳			
11号墳	円墳	径20×22m	横穴式石室	S39° E 南東
横穴		規模	平面形態	開口方向
1号横穴				北北西
2号横穴				北北西
3号横穴			平面とっくり形	北北西
4号横穴		残長2.96m	平面連台形状	東
5号横穴		残長4.6m	平面連台形状	東
6号横穴		残長4.6m	平面とっくり形?	東
7号横穴		残長2.15m	平面とっくり形	南東
8号横穴		残長2.8m	平面とっくり形	南東
9号横穴		残長4.2m	隅丸長方形	南東
10号横穴		残長3.3m		南東

括弧内は推定

表1 堀切古墳群一覧

### 3 堀切古墳群の古墳分布と既往の調査

#### (1) 堀切古墳群の古墳分布

甘南備山麓より北東方向に派生する丘陵上（標高約65～80m）に展開する堀切古墳群は、薪小学校東縁を南北に開析する谷を挟んで、東西二つの丘陵上に分布しており、現在までに古墳10基と横穴10基の分布が確認されている。

堀切古墳群をはじめとして、数基から多くとも20基程度で構成される小規模群集墳のあり方は、南山城の後期群集墳の特徴とも言え、隣接する河内・大和・北山城において100基を超える大規模群集墳を形成している状況とは著しい違いをみせている。なお、本古墳群のように、同一丘陵に古墳と横穴が拮抗した数で分布する例は、南山城では唯一堀切古墳群のみであり、横穴式石室墳と横穴の被葬者間の階層差や横穴築造の背景を考える上で重要である。

堀切古墳群・横穴群の分布をみると、東側丘陵上には、北から南に向けて1・2・3号墳、丘陵末端部に10号墳、1号墳南西40mの丘陵支尾根上に、今回新たに発見した11号墳、10号墳西側の丘陵腹部北向き斜面上に1・2号横穴（現在消滅）が分布する。一方の西側丘陵尾根線には、北から南に向けて4・7～9号墳、ここから南にやや離れた薪小学校裏山の丘陵頂部に5・6号墳、丘陵腹部の東向きから北向き斜面にかけて、3～10号横穴が分布する。なお、西側丘陵部の古墳・横穴は、未調査の6号墳以外、現在は大正期の砂防工事や筒栽培による土採り等の影響及び調査後にすでに消滅している。

#### (2) 既往の調査

堀切古墳群の調査は、昭和30年（1955）に実施された田辺郷土史会による踏査や古墳に関する聞き取り調査を嚆矢とし、この際、初めて当古墳群が横穴式石室を有する後期古墳と認識され、併せて堀切古墳群と命名されたようである。

この際の調査成果である『田辺町郷土史 古代編』<sup>4)</sup>を踏まえた各古墳の概要は以下の通りである。



第3図 堀切古墳群の古墳・横穴分布図

**1号墳：**横穴式石室を有する円墳で、大正期に石材採取を目的とした盗掘が行われ、この際、土器類や剣等の副葬品が出土したという。また、盗掘坑が南東方向に開くとされる。

**2号墳：**1号墳の峰終き南方30mに位置し、1号墳と同じ運命を辿った古墳とされる。同じ運命を辿ったとは、石室石材が採取され、石室が破壊されたと言う意味と思われる。

**3号墳：**2号墳の西方20mに位置する古墳で、大正期に石室石材が採取され、この際、ヨロイ・剣・土器等が出土したという。

**5・6号墳：**5号墳は墳丘・石室規模は不明だが、横穴式石室をもつ円墳である。円筒埴輪や副葬品が出土したらしいが、詳細は不明である。6号墳は調査が実施されておらず、墳丘規模や内部構造は不明だが、大型の墳丘で葺石が認められるという。

この後の昭和44年（1969）には、後世の土採りで形成された崖面から5・6号横穴が発見され、京都府教育委員会による発掘調査が実施された<sup>6)</sup>。この際、5号横穴からは人骨片等が、6号横穴からは竜山石の凝灰岩製組合式家形石棺が出土し、棺内から改葬人骨1体と金環1対、刀子等が出土した。また棺外から陶器TK209型式併行期の須恵器が出土している。なお、6号横穴の被葬者については、近年の調査で壮年前半の女性と判明している<sup>6)</sup>。

昭和53年（1978）には、現薪小学校建設工事に先立ち、田辺町教育委員会（現京田辺市）により、西側丘陵部の4・7～9号墳、4・7～10号横穴の調査が実施された<sup>7)</sup>。各古墳の概要は以下の通りである。

**4号墳：**標高76.5mの丘陵尾根上に位置し、径20m、高さ2mの円墳と思われるが、全長約28mの前方後円墳の可能性も指摘されている。南南東に開口する横穴式石室をもち、玄室側壁基底石1石と小石材を数点残すのみであるが、玄室幅は1.2mと判明している。付近から陶器TK43～TK209型式併行期の須恵器等が出土している。埴輪等の外部施設は確認されていない。なお、昭和44年の横穴調査時に、須恵質陶棺が出土しており、4号墳に伴うものと推定されている。

**7号墳：**4号墳の南、標高約75.0mに位置する径約15mの円墳である。墳丘の大半が削平されており、埋葬施設の規模・構造は不明であるが、周溝内から須恵質の円筒埴輪、直弧紋風の刺青紋様をも



第4図 堀切6号横穴組合式家形石棺出土状況（東から）



第5図 7号墳出土人物埴輪①



第6図 7号墳出土人物埴輪②



第7図 9号墳玄室床面(東から)



第8図 堀切7・8・9号横穴全景(南から)

つ人物埴輪(第5・6図)等が出土している。6世紀前半。

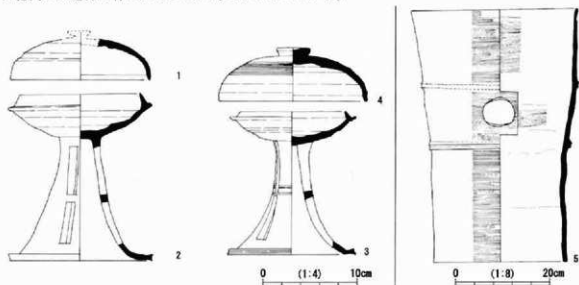
**8号墳:**7号墳の南、標高約76mに位置し、周溝状の落ち込み等から径16m程度の円墳と推定されているが、墳丘や石室は一切確認されておらず、古墳かどうかの判断が難しい。

**9号墳:**標高約77mに位置する径約20mの円墳と推定される。埋葬施設は南西方向に開口する横穴式石室で、玄室長約3.5m、羨道部長約1.7mと推定される。玄室床面は円礫を敷き詰めた床で、板状石材による組合式箱形石棺が安置されていたと考えられる。床面から銀環・鉄刀・ガラス玉の他、TK43~TK209型式併行期の須恵器高杯等が出土している。

**10号墳:**円墳と思われるが、調査は行われておらず、墳丘規模・内部構造は不明である。

**11号墳:**今回新たに発見した横穴式石室墳(円墳)で、土師質亀甲形陶棺を安置する。

**横穴群:**出土遺物は、先述の5・6号横穴を含めて、概ねTK209~TK217型式併行期の遺物が出土しており、7世紀前半代を中心とする。10号横穴では、銅製帯金具が出土しており、8世紀代にも追葬が行われたことが明らかとなっている。



第9図 4・7・9号墳出土遺物(1~3:9号墳 4:4号墳, 5:7号墳)

## 4 調査の経過

### (1) 平成16年度調査（試掘調査）

試掘調査は開発区域全域を対象とし、区域内南側の古くから1号墳とされている高まり（1Tr・2Tr）とその南側の高まり（推定2号墳）につながる斜面（3Tr）のほか、区域内の北側の高まり（5Tr）、その南側の平坦面などにトレンチを入れ調査を行った。また、過去に1号墳の北方斜面すそ付近で横穴（堀切1・2号横穴、現在は消滅）が見つかったことから、竹やぶ内の崖面精査（4Tr付近）を行うなど、横穴の有無についても可能な限り調査を行った。

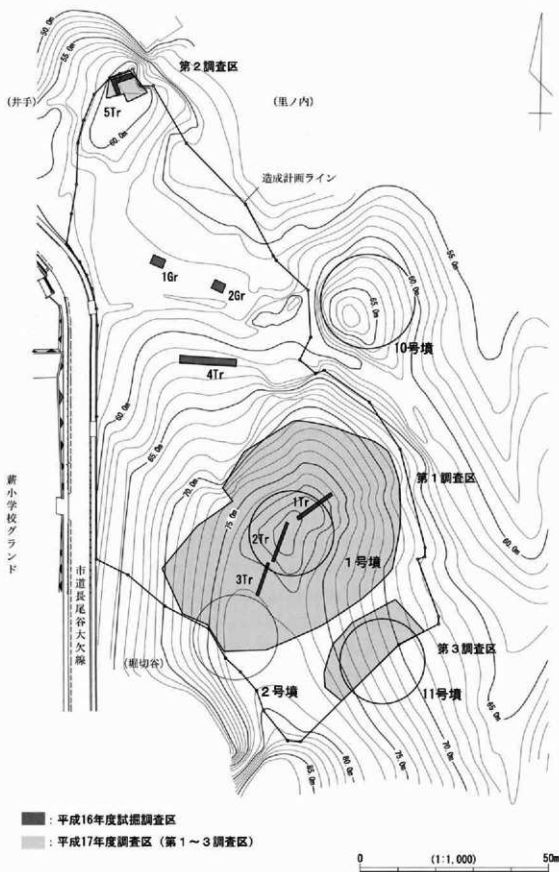
1号墳については、大きな石抜き穴がみられ、横穴式石室を内部主体とする直径25mほどの円墳とみられた。南側についても、古墳裾と考えた部分から須恵器のカメの破片が見つかったことから古墳の可能性が高いものと考えられた。北側の高まりでは、予想に反し高まりは1m以上の堆積土によるものであったが、地山面から須恵器片が見つかり、近くに古墳があったものと考えられた。

平坦面は、2.5m以上の土砂の堆積がみられ、かつては谷であったことがわかった。また、横穴については確認できなかった。



第10図 1号墳試掘調査後全景（南西から）





第11図 調査区位置図・開発計画線



第12図 1号墳樹木伐採作業風景（南西から）



第13図 4Tr付近崖面精査後（北東から）



第14図 5Tr全景（北東から）

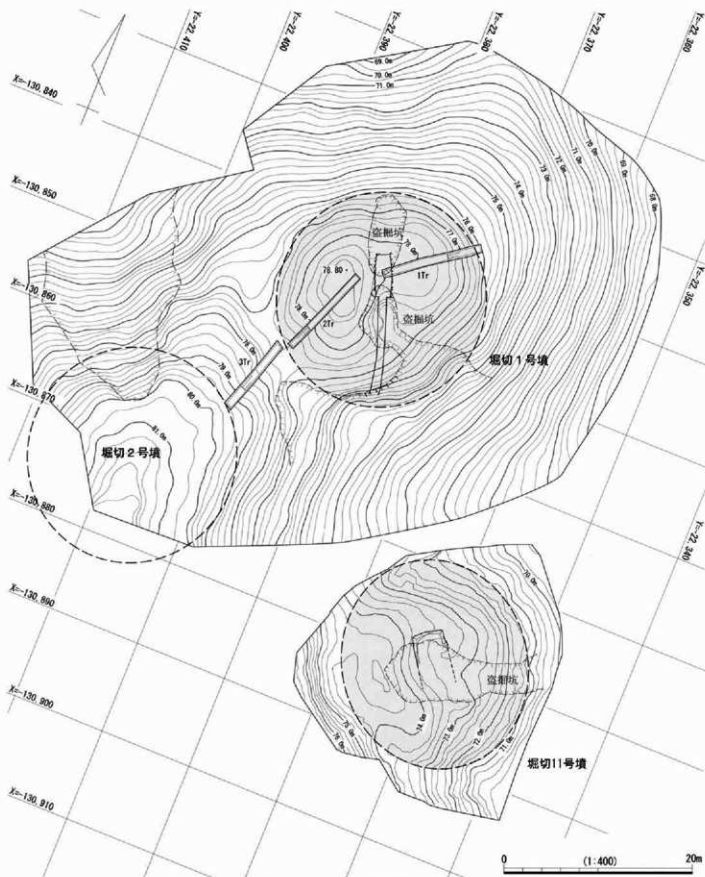
## （2）平成17年度調査（本調査）

現地調査は平成17年5月27日から着手し、樹木・竹等の伐採後、まずは1・2号墳の位置する第1調査区の現況測量を実施した。

現況測量調査の結果、1号墳は直径20m前後の円墳と判明し、墳頂部において、昭和30年の踏査記録通り、大正期石材採取時の南東方向の盗掘坑を確認した。一方、1号墳の峰続き南方30mに位置するとされる2号墳では、盗掘跡や墳丘状の高まりは一切確認できず、墳丘流出と石室の崩壊が相当進行していることが予想された。

調査はまず1号墳から開始した。1号墳は以前から横穴式石室墳と想定されていたものの、現況では石材の露出箇所が見られず、また石室内に堆積した流入土の影響で開口部が不明となっていたため、横穴式石室かどうかの判断も難しい状況であった。このため、まずは羨道部と推定した溝状に窪んだ箇所と、墳頂部とを結んだ線を基線にセクションを設定し、さらにこれに直行する方向にセクションを設定して、開口部の確認に努めた。なお、セクション設定後に、1号墳の表土掘削・墳丘検出作業を開始したが、伐採後の切株の抜根作業や地衣類の除去作業等に困難を極め、猛暑も手伝って、約2ヶ月半を費やした。

1号墳の墳丘検出作業が軌道に乗った段階で、石室内の調査を開始した。石室内では、表土下1m以上掘削しても石材が全く出土しなかったため、全壊に近い状態ではないかと憂慮したが、表土下約1.2mで玄室奥壁とみられる花崗岩の1枚石と羨道部の大型石材が現れた。奥壁



第15图 1·2·11号墳现状测量图

の1枚石は原位置を保っており、これを基準にセクションを再設定して調査を進めた結果、当初の予想に反して石室が良好に遺存していることがわかった。さらに掘り下げると、表土下約2.5mにおいて、奥壁2段目が前倒し状態で落下したと考えられる大型石材が出土した。図面・写真等の記録作業を終えて、これを人力にて除去後、下面から銭貨埋納土坑や瓦器・土師皿等が出土した。これにより、石室が中世から近世にかけて盗掘あるいは再利用されていることがわかった。また、この時期まで石室が崩壊することなく遺存していたことを確認した。中・近世の堆積土除去後、古墳築造当初の円礫を敷き詰めた玄室床面が現れた。床面からは、凝灰岩製組立式家形石棺や、馬具・武器・ガラス玉・土器類をはじめとする豊富な副葬品が出土した。なお、2号墳では、古墳の存在を示唆する遺構・遺物は全く認められず、調査範囲を拡大してさらに精査を試みたが同様の結果となった。こうした状況から、従来古墳と想定されてきた2号墳は、古墳ではなく、古墳状の自然地形であると考えられた。

1・2号墳の大意が判明した後、第2調査区の調査に移行した。当調査区では、試掘調査時に須器片とともに墳丘状の高まりと盛土を確認しており、古墳や横穴の発見に期待されたが、調査の結果、この墳丘状の高まりは、近・現代の筒栽培に伴う置土で形成された隆起と判明し、かつてこの付近に古墳あるいは横穴が存在していた可能性を示唆するにとどまった。

調査期間も差し迫った10月7日には、視察に訪れた有識者の方々から、1号墳の南東約40mに墳丘状の高まりと盗掘坑らしき箇所があるとの指摘を受けた。指摘箇所は、従来、古墳の存在が知られていない山林であったが、試掘調査を実施した結果、1号墳の石室石材と同種の小石材や土師質亀甲形陶器片が出土し、新たな古墳の存在が確定となった。当箇所は今回の開発区域内に含まれるため、緊急的に調査の必要性が生じた。このため、関係機関との協議を済ませた後、周辺の樹木の伐採と現況測量を行い、墳丘規模と埋葬施設の内容を確認する目的で、墳頂部から3方向にトレンチを設定して調査を開始した。開発ラインが埋葬施設と墳丘を東西に2分して通ることや、調査期間が限られていたこともあり、十分な調査を行えなかった感もあるが、調査の結果、横穴式石室を有する直径約20×22mの円墳1基を確認した。これにより当古墳を新たに堀切11号墳と命名した。

調査がほぼ終了した10月15日には、現地説明会を開催した。当日はあいにくの雨となったが、約150名を越える参加者があり盛況であった。同月19日には、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏により、1号墳石室の石材材質を鑑定していただき、側壁や敷石の石材は、主に近隣の手原川流域で採取できるホルンフェルス为主体としていることが判明した。併せて当玄室内出土の組立式家形石棺が、京都盆地では希少な二上層群下部ドンズルボー層凝灰岩、いわゆる二上山白石であるとの御教示を得た。同月24日には、石室内の敷石除去と石組の暗渠排水溝の調査を終了し、床面と敷石間覆土を土嚢に詰め込んでフルイ掛けを行い、この際、ガラス玉数点を得た。10月25日には、1号墳石室の裏込め土の状況と石室掘り方の調査等の補足の記録作業を行い、10月28日に全ての現地作業を終了した。最終的な調査面積は約2000㎡である。



第16図 1号墳表土掘削作業風景（北東から）



第17図 1号墳石室調査前状況（北から）



第18図 1号墳周溝掘削作業風景（北から）



第19図 1号墳石室内掘削作業風景（東から）



第20図 1号墳石室内中世面作業風景（南東から）



第21図 1号墳石室石材材質鑑定作業風景（北から）



第22図 11号墳石室内作業風景（西から）



第23図 現地説明会風景（南から）

## 5 堀切1号墳

### (1) 調査前の墳丘

西側丘陵尾根の最高所から北にやや降った、標高75.5m～78.7mの丘陵頂部に位置する。墳丘の位置する尾根筋は、南西から北東方向に向けて緩傾斜面が続き、尾根側面は痩せ尾根状の急傾斜面となっている。墳丘の現況は、墳丘南東側斜面の流出が著しいものの、全体に旧状を良くとどめており、現況測量調査から直径20m程度の円墳であることが予想された。

埋葬施設については、昭和30年の踏査記録から、横穴式石室を内部主体とする後期古墳と想定されていたが、現況では、天井石をはじめとして石材の露出箇所が全く見られないことや盗掘抗が随所に開口する等、相当大規模な擾乱を受けていたことから、横穴式石室かどうかとも明確にし難い状況であった。

### (2) 墳丘

墳丘背後に尾根筋を分断する形で平面半円弧状の周溝が巡り、ここから尾根側面の墳丘北西側にかけて、標高76.0m前後の傾斜変換線と、幅狭い平坦面がほぼ円形に巡ることから、ここが墳裾と考えられる。一方の墳丘南東側は、急斜面のため墳丘流出が著しく、後世の土取り等の影響で崖状を呈する箇所もあるため、墳裾の想定は困難であるが、両側縁の傾斜変換線の流れと尾根幅等を考慮すると、墳丘規模は直径約22mで墳形は円形と考えられる。墳丘高は、周溝最深部から2.7m、尾根先端部側の墳丘北東裾から2.9mをはかり、尾根先端部側がわずかに低い。墳頂部最高所の標高は78.80mである。

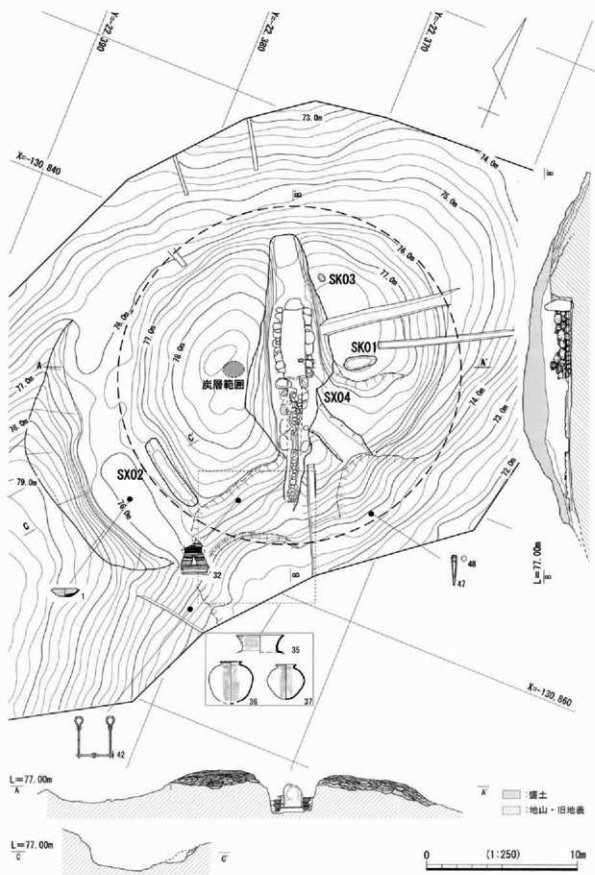
墳丘築成に際しては、尾根筋を分断して造り出した基盤層上に盛土することで整形しており、周溝の巡る墳丘南西側は、基本的に地山整形により墳形を整えている。なお、墳丘表面には葺石・埴輪等の外部施設は認められなかったが、墳丘南西裾部で、長方形土坑SX02、墳頂部付近で焼土坑SK01と土坑SK03を検出した。これについては後述する。



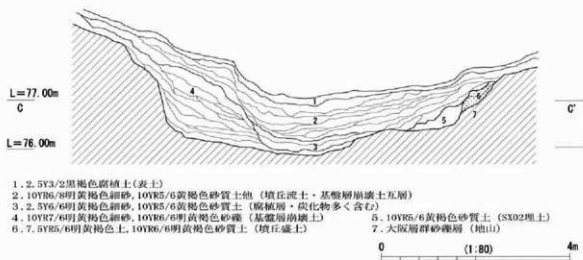
第24図 1号墳調査前風景(南西から)



第25図 1・2号墳調査前風景(北東から)



第26图 1号墳填丘測量圖



第27図 1号墳周溝土層断面図(C-C'ライン)



第28図 1号墳周溝土層断面(南西から)

周溝は、尾根両側面に向かうにつれて浅くなりつつ自然地形に移行しており、基底部幅は最大3.7m、検出面からの深さは尾根筋で最大1.8mをはかる。断面形は外縁部側が急傾斜の逆勾形形状を呈し、底部はやや起伏がある。

周溝内埋土は基本的に3層に大別でき、第1層の表土以下、第2層が明黄褐色系の填丘及び基盤層流出に伴う自然堆積層、第3層が黄褐色系腐植土層、第4層が基本的に尾根上部側の基盤層流出に伴う自然堆積層である。遺物は主に第3層中から出土し、玄室内出土土器と同一個体の須恵器甕片等10数点が出土した。また、第3層直下で、完形の須恵器杯身が口縁部を下にした状態で出土したが、意図的なものかどうかは不明である。他に、填丘東側斜面で鉄製石突、環状金具、填丘外で、馬具(轡)等が出土した。馬具・金属製品は、盗掘時に石室内から持ち出され、石室外に投げ捨てられた状況と思われる。



第29図 周溝内遺物出土状況①  
(北東から)





第30図 1号墳墳丘全景①（南東から）



第31図 1号墳墳丘全景②（南西から）

### (3) 盛土

盛土は基盤層である大阪層群及び旧地表面上から施されており、墳頂部付近で厚さ1.0m、尾根先端側と尾根側面側の墳丘南東・北西部において、厚さ約0.9m分確認した。周溝の巡る墳丘南西側では、一部に盛土が確認できるものの、基本的に地山整形で墳形を整えている。

墳丘断ち割り調査の結果、墳丘築成は少なくとも以下の4工程に大別することが可能である。

**第1工程**：尾根上部側の基盤層を削平して、標高77.2m前後の平坦面を確保した後、この平坦面と高さを揃えるため、標高の低い尾根先端側と尾根側面側に盛土する。この際、墳丘中央部付近に基底部幅1.8m、高さ0.3mの土堤状の盛土を設け、墳丘外表面側に向けて墳丘を順次拡張するようにして盛土を施す。こうして第2工程の基礎となる平坦面を確保する。この際用いる盛土は、旧表土と同質の第1層で構成されており、主に尾根上部側を削平した際に得た掘削土を用いたと考えられる。なお、この第1工程に先行、あるいは併行する形で、墳丘裾となる尾根先端部側の地山整形と周溝掘削が行われたものと推察する。尾根上部側の掘削土の移動を考慮すれば、石室掘り方の掘削は第1工程完了後であろうか。

**第2工程**：第1工程完了面の石室寄りに、基底部幅2.5m、高さ約0.6mの土堤状の盛土(第Ⅱ層)を施し、これに持たせ掛けるように、基底部幅0.5～0.8mの帯状盛土(第Ⅲ層)を土堤状の盛土と高さを揃えつつ、順次墳丘外表面側に向けて施す。石室を挟んだ尾根上部側ではこの帯状盛土が4単位以上確認できる。土堤状の盛土は、粘性・締まりの強い橙色系粘質土・礫混土を用いており、大阪層群中の粘質土層が供給元と考えられる。帯状盛土は、にぶい黄褐色礫混砂質土、明黄褐色砂質土、橙色系粘質土の3種類の盛土で構成される。

**第3工程**：第2工程完了後及び石室構築が第1工程完了面まで達した段階で、先の土堤状の盛土と石室側壁・奥壁裏面との間に盛土が施される。石室裏込め土と墳丘盛土との接続箇所は攪乱のため層序関係は不明だが、少なくとも第1工程完了面より上位に位置する石室裏込め土は、第3工程に併行して施されたと考えられる。盛土は第Ⅲ層と基本的に同質である。なお、第3工程盛土中で、幅約1.2m、厚さ約0.05mの黒色炭層を検出した。後述する焼土坑SK01に関連した炭層の可能性が高い。

**第4工程**：橙色系砂質土等(第Ⅳ層)を用いて、墳丘表面を覆うように水平方向に広範囲にわたって施される。後述するが、第3工程完了面は玄室天井部推定高に一致しており、これより上部の第4工程の盛土は、天井石横架後に施された天井石被覆土の可能性が高い。

### (4) 墳丘内で検出した遺構

**SK01** 第2工程完了面上で検出した平面長楕円形の焼土坑である。長さは2.2m、幅は南西側が0.8m、北東側がやや狭く0.5mをはかり、深さは0.15mと浅い。底部は概ね平坦で横断面は逆台形を呈する。

埋土は下層が5cm大の炭化物を含む黒色炭層、上層が焼土塊を多量に含む赤色焼土層である。



第32図 1号埴埴丘土層断面図



第33図 1号埴埴丘土層断面(西か5)



第34図 1号埴埴丘土層断面(北から)

被熱層は壁面にのみ確認でき、底面には認められなかった。なお、墳丘上に焼土坑を伴う例は、京都市西京区大枝山古墳群4・22・25号墳<sup>\*)</sup>、同右京区御堂ヶ池20号墳<sup>\*)</sup>等でも確認されており、炭・灰を散布する等の火を伴う祭祀が行われたと想定されている。当古墳では、墳丘築成第3工程途中で、厚さ0.05m、幅1.2mにわたる黒色炭層を検出

しており、SK01に関連する可能性がある。この場合、天井石横架前に、墳丘上で火を伴う祭祀が執り行なわれ、その際に墳丘上に炭・灰等が散布された状況が想定できよう。

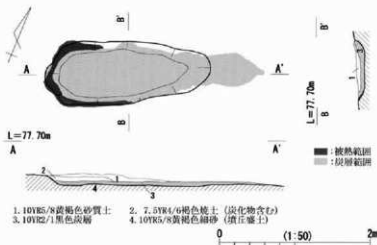
**SK02** 墳丘南西裾で検出した長さ5.0m、幅1.0m、深さ最大0.3mの長楕円形の土坑である。横断面形は皿状で、底部はやや起伏があり平坦でない。周溝内埋土第3層堆積以前に墳丘斜面を削り込むように掘り込まれており、墳丘裾に位置することからも、1号墳に関連した遺構の可能性はある。ただし、遺物は出土しておらず、時期・性格は不明である。

**SK03** 墳頂部平坦面で検出した、長さ0.7m、幅0.48mの平面楕円形の土坑で、検出面からの深さは最大で0.13mをはかる。

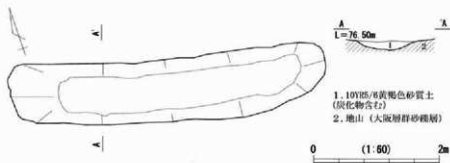
埋土に炭化物を多く含むが、焼土や骨片等の出土は認められなかったため、墓ではないと思われる。遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。



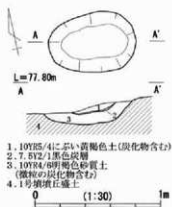
第37図 SK03検出状況（南西から）



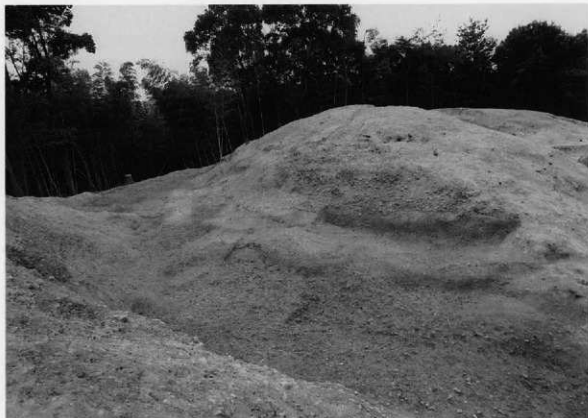
第35図 SK01実測図



第36図 SK02実測図



第38図 SK03実測図



第39図 1号墳周溝完掘状況(南から)



第40図 1号墳填丘北側裾部(西から)



第41図 1号墳周溝内遺物出土状況②(南から)



第42図 SK01検出状況(南から)



第43図 SX02完掘状況(南西から)

## (5) 埋葬施設

埋葬施設は南南東に開口する両袖式構造の横穴式石室である。石室規模は全長約9.3m、玄室長4.60m、玄室奥壁幅1.37m、玄室中央部最大幅1.80m、残存高1.50m、羨道部長約4.70m、羨道部幅1.06mをはかり、羨門部から墳丘斜面にかけて全長5.6mの土壁の墓道が延びる。

石室主軸は南から約24度東に偏し、開口部は視界の悪い山側の南南東を向く。視界の悪い山側を向く理由としては、石室長に見合う安定した基盤層を確保するために、幅広い尾根上部寄りに開口部を設けて石室構築を行ったことによるものと思われる。墳丘中心部には玄門部が位置しており、奥壁は墳丘中心部から約4.5m北北西側に位置する。

石室は主に大正期の石材採取に際し、天井石を含めてすでに石材の大半を失っており、これ以前にも平安時代から鎌倉時代にかけて2回、中世後半～近世にかけて1回以上の再利用あるいは盗掘を受けていたが<sup>10)</sup>、当初、全壊と予想していたのに反して良好に遺存していた。

**玄室部** 平面形はやや胴張りの縦長長方形で、石室主軸で長さ4.60m、奥壁幅1.37m、中央部最大幅1.80m、玄門部幅1.60m、残存高1.50mをはかる。左右ともに袖石を失うが、羨道部側壁基底石間が玄門部幅に比べて左右ともに幅狭くなるため、両袖式と考えられる。玄門部左右には大きな石材採取り坑が認められ、本来は大型の袖石が設置されていたと考えられる。

床面は扁平な河床礫を敷き詰めた敷石で、玄室奥壁側半分はこの敷石上にさらに径0.05～0.1mの円礫を2～3重の厚さで敷き詰めた礫床である。円礫上面では凝灰岩製組合式家形石棺片が散乱した状態で出土しており、円礫は初葬時に棺床として敷設されたものと考えられる。一方の玄門部側では円礫の敷設は見られず、河床礫の隙間を埋める程度に補助的に使用されている。床面敷石の標高は玄室中央部で75.65mをはかる。なお、敷石は、近隣の手原川流域で採取できる黒色味の強いホルンフェルスを主体とするが、玄門部から奥壁側約1m付近に、1点だけ家形石棺と同種の二上山白色凝灰岩が使用されており、扁平な河床礫風に加工されていることから、当初から敷石使用を目的に製作された可能性が高い<sup>11)</sup>。

左右両側壁は現状で3～4段目まで遺存する。1段目となる基底石は、両側壁ともに幅0.2～

0.6m程度の小・中型石材を、横位を基本に設置しており、奥壁側から羨道部側に向けて順次小振りの石材を用いている。基底石上面は横目地が良好に通っており、敷石床面の高さにはほぼ一致することから、床面敷石敷設に際して、基底石上面の高さを基準とした可能性が高い。側壁2段目は、幅0.6～0.8m程度の中・大型石材を主体に、小型石材を間に充填しつつ、横位を基本に積み上げており、高さ調整を小まめに行い積み上げを行っている。3段目以降も同様で、両側壁は2段目以降か



第44図 1号墳玄室側壁目地の灰白色粘土  
(北東から)

L=77.00m  
E

L=76.00m  
E

E'D

D'C

L=76.00m  
C

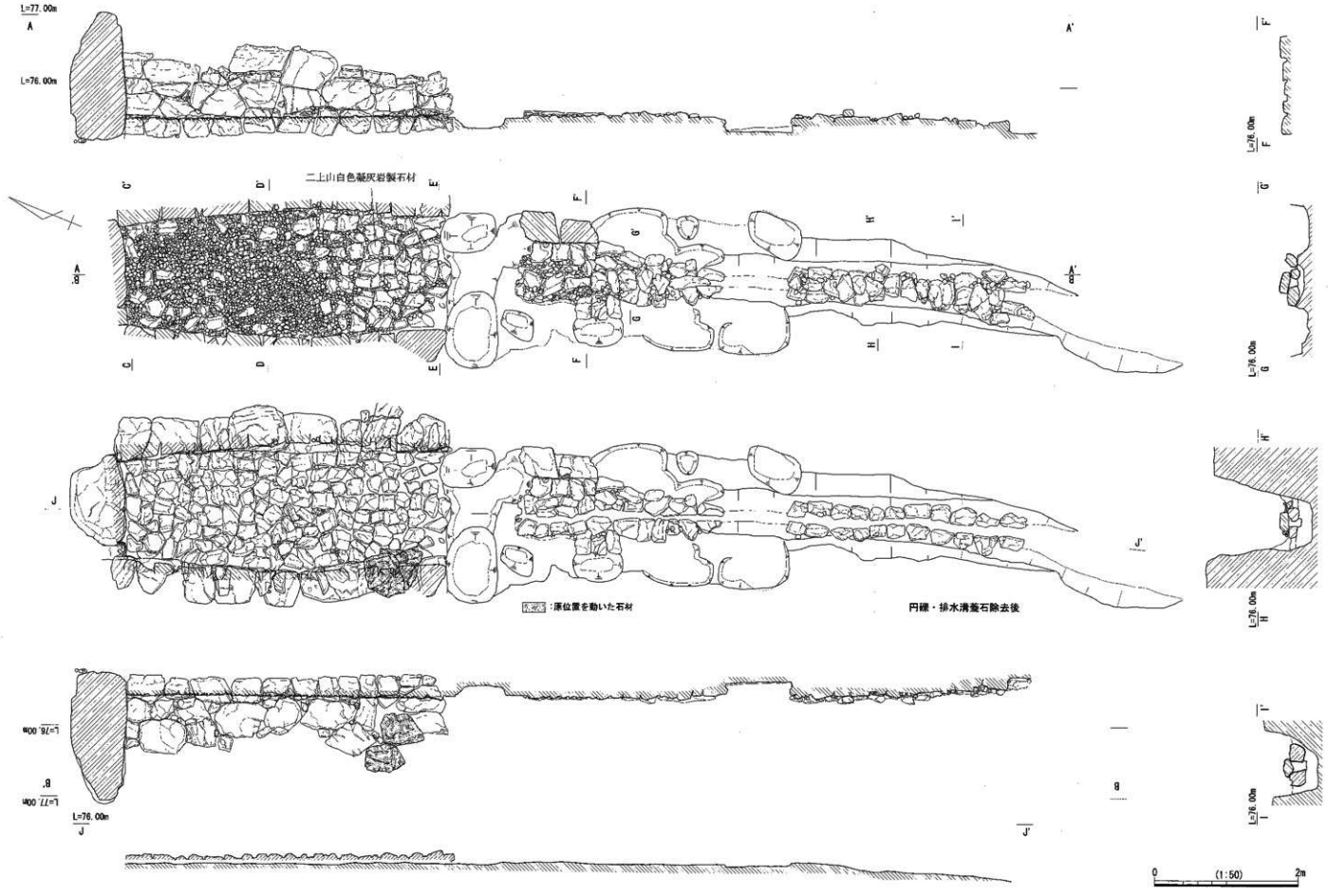
L=77.00m  
C

L=76.00m  
J

L=77.00m  
J

L=77.00m  
A

L=76.00m  
A



第45図 1号墳石室実測図

らやや内側に迫り出させて積み上げる、いわゆる持ち送り手法により構築されている。なお、両側壁石材間の目地には、大阪層群の淡水性の粘土層である灰白色粘土による目張りが施されており、床面直上層にも剥落した灰白色粘土が多く認められたことから、本来は、側壁・奥壁全体の目地に施されていた可能性がある。なお、側壁石材の上下の設置面にも同種の灰白色粘土が使用されており、これは側壁石材の積み上げ時に、設置面の安定を図るために使用された粘土と思われる。

奥壁は、高さ1.85m、幅1.25m、厚さ0.8mの花崗岩の1枚石を基底石としており、右側壁との隙間に四角柱状の花崗岩割石等を縦位に据えて奥壁幅を確保している。壁面はほぼ垂直である。奥壁1枚石下には、溝状掘り込みと根固め石が確認でき、掘え付け坑掘削後に設置したと考えられる。これは1枚石の底面が平坦でなく、不安定な丸底気味であったことに起因したものであろう。奥壁前面では、幅1.25m、長さ0.8m、厚さ0.65mの平面三角形の大型の花崗岩が出土しており、この石材と奥壁1枚石の横幅及び1枚石左側上端の隙間の形状がほぼ一致することから、大型石材は天井石が落下したのではなく、奥壁2段目が前倒し状態で落下した際の石材とみてほぼ誤りない。これをもとに奥壁2段目上端の高さを復元すると、円礫床面から約2.3mとなり、天井石被覆土と考えられる墳丘築成第4工程の盛土下面の高さに一致する。したがって、奥壁2段目上端の高さが本来の玄室天井高に相当する可能性が高く、玄室高は、円礫上面から2.3m程度あったものと想定できる。

**羨道部** 玄門部から左右側壁基底石の石材採取り坑が途切れて、石室掘り形が左右に屈曲して幅狭くなる箇所までが羨道部と考えられる。現状では、左側壁基底石2石と床面の敷石が残存するのみだが、羨道部長約4.7m、左側壁基底石と基底石採取り跡及び床面敷石からみて、羨道部幅は中央部で1.06mをはかる。床面標高は羨道中央部と羨門部付近で75.70mをはかり、玄室床面より約0.05m高いことから、羨道部から玄室側に向けて下る勾配が認められる。

左側壁は中型石材を横位に据えて基底石としており、床面は玄室同様0.3～0.5m大の扁平な河床礫を敷き詰めた敷石である。敷石下には、石室主軸に並行した石組の暗渠排水溝が埋設されている。



第46図 1号墳玄室内大型石材崩落状況（北東から）



第47図 1号墳玄室左側壁石材検出状況（南西から）



側壁基底石と敷石の敷設は、排水溝埋設後に石室掘り方底面に5cm程の置土を敷き入れた後に開始されている。なお、排水溝蓋石は羨道部床面敷石を兼ねている。排水溝蓋石と側壁基底石との隙間には円礫が補助的に充填されるが、玄室玄門部と同様に、隙間を埋める程度に補助的に使用されており面的な敷設は認められない。なお、羨道部玄室寄りの床面上から、ほぼ完形の須恵器高杯蓋2個が石室主軸に沿って正置した状態で出土しており、玄室内から意図的に持ち出して据え置いた可能性がある。これについては後述する。

**墓道** 羨道部側壁基底石の抜取り坑が途切れ、墳丘斜面に向けて切り通し状の土壁が延びる全長約5.6mが墓道と考えられる。石室主軸から周溝側に曲がりつつ墳丘斜面に至っており、羨門部付近で上端幅1.1m、下端幅0.75m、墳丘斜面側で下端幅0.9mをはかる。高さは、排水溝蓋石上面から墓道肩部までで最大約0.9mをはかり、横断面は「U」字形を呈する。

左石壁面の下側2/3は旧地表及び地山の基盤層で、その上層は墳丘盛土となっている。おそらくは、墳丘築成の最終段階あるいは最終埋葬後に、排水溝蓋石を含めて墓道肩部まで覆い隠すように盛土が施されたと推察する。

なお、排水溝蓋石の上位約0.2mから墓道肩部までが盗掘後の自然堆積層であり、最終盗掘以降は長らく開口状態にあったことが窺える。このため、閉塞施設や追葬時の掘り返し痕跡等は認められなかったが、羨門部付近の排水溝蓋石上面で、正置した状態の有蓋高杯蓋1点が出土した。これとセット関係の高杯が玄室内で出土しており、高杯蓋は、墓道埋め戻し前に玄室内から意図的に持ち出されて据え置かれた土器と考えられる。初葬時の墓道埋戻し土の下面に位置しており、出土位置が羨門部付近であることから、墓道埋め戻し前の墓前祭祀に伴い据え置かれた土器と思われる。同様な例は、周辺では、京都府八幡市女谷C支群2号横穴、同八幡市荒坂B支群15号横穴等でも確認されている<sup>10</sup>。

**排水溝** 玄門部から墓道にかけては、全長7.3m、内法幅0.1～0.15m、深さ0.15～0.2mの石組の暗渠排水溝が埋設されている。排水溝主軸は羨道部側では石室主軸にほぼ並行しており、羨門部から墓道側にかけては、やや周溝側に曲がりつつ墳丘斜面に至っている。玄室内には同種の排水溝は認められず、また、特別な排水施設も認められなかった。

排水溝は、石室掘り方底面に素掘りの溝を掘削して底面に置土を敷き入れた後、幅0.2～0.5m前後の河床礫を左右側壁に据え、上面に同じく河床礫の蓋石を横架させて断面箱形の暗渠としたもので、底面に敷石はなく、置土上面が直接溝底面となっている。なお、玄門部が攪乱されているため排水溝の基部構造は不明であるが、玄門部側と墓道側の排水溝底面の比高差は0.14mで、墓道側が低く、また、玄室奥壁側敷石底面と玄門部排水溝底面との比高差は約0.02mで玄門部側が低いため、玄室奥壁側敷石底面から墓道排水溝底面に向けて下る勾配が確認できる。このため、玄室内に特別な排水施設を設けなくとも、玄室敷石間の目地を通った雨水等は排水溝から石室外に流れ出る仕組みであったと考える。ちなみに、調査後、玄室内に溜まった雨水が羨門部付近に集まり、暗渠排水溝内から石室外に流れ込む状況を確認している。



第48図 1号墳石室検出状況（南東から）



第49図 1号墳玄室敷石検出状況①（南東から）



第50図 1号墳玄室敷石検出状況②（北西から）



第51図 1号墳石室排水溝蓋石除去後（南東から）



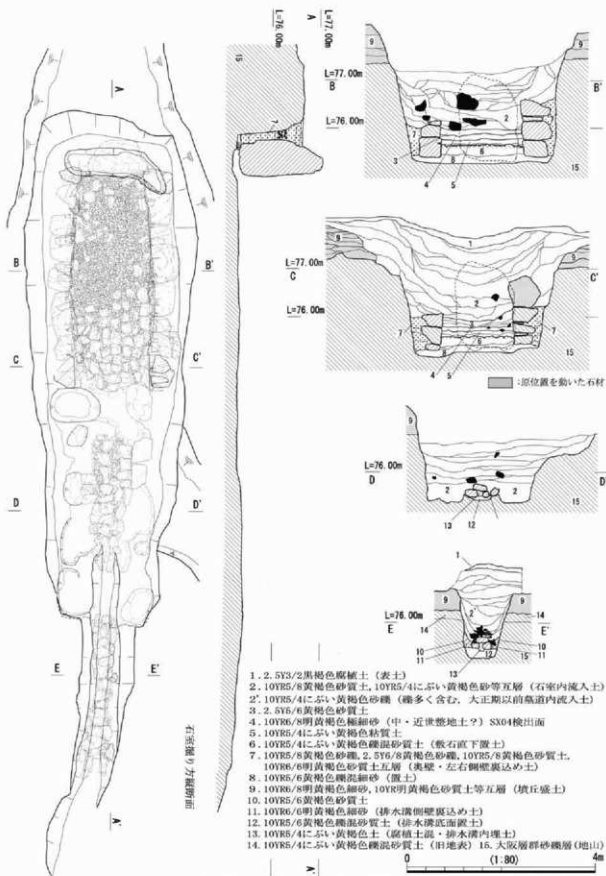
第52図 1号墳玄室右側壁（東から）



第53図 1号墳玄室左側壁（南から）



第54図 1号墳玄室敷石・置土除去後（南東から）



第55図 1号墳石室掘り方・土層断面図

**石室掘り方と床面構造** 基盤層を平面長台形状に掘削して石室掘り方としており、掘り方主軸で基底部長10.05m、奥壁側基底部長2.7m、中央部最大幅2.9m、羨門部基底部長2.0m、深さは最大で2.2mをはかる。横断面は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。奥壁・左右側壁は80度を越える急傾斜となっている。

掘り方底面には、玄室内で厚さ0.1～0.2m、羨道部で約0.05mの置土が敷き入れられており、玄室・羨道部ともに、置土上面から側壁・奥壁基底石と敷石敷設を行っている。左右側壁・奥壁裏面と掘り方間の控えは約0.2mと狭い。この間に施される裏込め土は、締まりの強い黄褐色系・明黄褐色系の砂質土及び礫混砂質土互層で構成される。

石室内の基本的な層序は、第1層の黒褐色腐植土（表土）

以下、第2・3層が石材採取後の石室内流入土、第4層が明黄褐色極細砂、第5層はにぶい黄褐色粘質土で上下2層に細分でき、上層は瓦器等を含む自然堆積層、下層は床面直上層で黒色土器A類碗と「て」字状口縁土師皿を含む自然堆積層となっている。なお、第4層の明黄褐色極細砂は、石室床面遺物を覆い隠すように丁寧に敷き入れられており、上面で銭貨埋納土坑SX04を検出していることから、人為的な整地土層と思われる。第5層下層は玄室床面となっており、玄室奥壁側半分のみには円礫が敷設されている。この円礫は石棺棺床として敷設されたものであるが、初葬時に組合式木棺やそれ以外の埋葬方法を採用した場合、円礫下の敷石を初葬とし、この上の円礫を追葬時のものと想定することも可能である。ただし、これについては、敷石上面で土器片等を含めた遺物が一切出土しなかったこと、また、敷石に石棺材と同じ二上山白石凝灰岩が使用されていること、羨道部において、円礫が初葬時に床面構築材としてすでに使用されていること等から、円礫敷設は追葬時のものではなく、初葬時の造作と考えるのが妥当であろう。



第56図 1号墳奥壁裏込め状況  
(南西から)



第57図 1号墳石室内流入土 (南東から)



第58図 1号墳石室内セクション設定状況 (西から)



第59図 1号墳墓道内土層断面(南東から)



第60図 1号墳石室掘り方検出状況(北西から)

墓道内の埋土は、第1層の表土以下、第2'層が盗掘後流入土、第10層が初葬段階の墓道埋戻し土、第11層が排水溝側壁裏込め土、第12層が排水溝底面置土となっている。

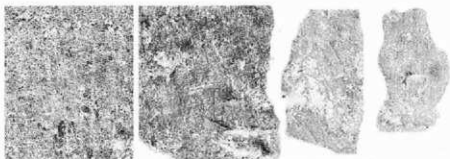
遺物は主に第5層下面と第10層上面で出土した。これについては後に述べる。

**組合式家形石棺** 玄室床面上からは、二上層群下部ドンズルボー層凝灰岩の組合式家形石棺が出土した。いわゆる二上山白石の組合式家形石棺である<sup>13)</sup>。京都盆地における二上山凝灰岩製家形石棺の出土は非常に希少であり、管見にのぼるものでは、京都市右京区普戸山5号墳(組合式)<sup>14)</sup>、向日市物集女車塚古墳(組合式)<sup>15)</sup>、長岡京市今里大塚古墳(組合式)<sup>16)</sup>と本古墳出土棺の4棺のみにとどまり、宇治以南の南山城地域での出土は今回が初である。

石棺片は、玄室中央部と玄室右袖部付近の床面上から破砕された状態で出土した。原位置を保つものは認められず、また全形を復元できる状況にないため、盗掘時に大半が持ち去られたと考えられる。ただし、接合状況や各部の規格等からみて、破片は全て同一個体の石棺であり、玄室内に安置されていた石棺は1棺のみであったと考えられる。

aは残存幅52.5cm、残存長32.0cm、厚さ10.5cmの棺蓋部片で、内面外縁部に幅2.5cm、高さ0.7cmの段が巡る。棺蓋部斜面の角度は19度、面取り幅は約6.2~7.0cmで、蓋土上の平坦面幅は広い。小口側は整型工具により平坦に仕上げられており、棺蓋は1枚石ではなく、少なくとも2枚継ぎ以上で構成されていたと考えられる。なお、現状では風化が著しく、淡いピンク色を呈するが、外面全体に赤色顔料の塗布が認められる。bは残存長23.6cm、残存幅10.5cm、厚さ10.2cmをはかる棺蓋コーナー部片である。内面外縁部に段が認められる。外面には不明瞭ながらも赤色顔料が認められる。cは残存幅29.0cm、残存高28.5cm、厚さ10.5cmをはかる棺身短側部片で、内面に幅5.5cm、深さ2.0cmの溝状削り込みが認められる。外面全体に煤の付着がみられ、一部破面にも及ぶことから、石棺破砕後に石室内で火を使用した際に2次的に付着したものと考えられる。dは残存長12.7cm、残存高10.5cm、厚さ10.5cmをはかり、内面に幅3.2cm、深さ0.8cmの溝状の削り込みが認められることから、cと同様、棺身短側部片

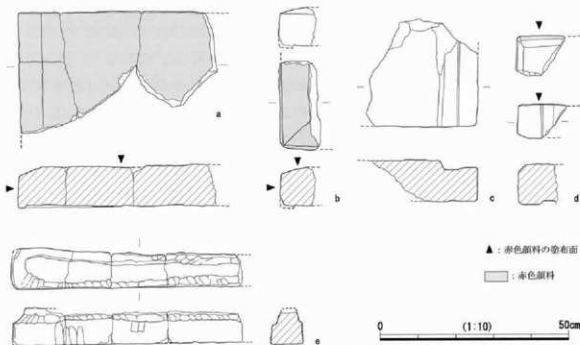
の可能性もあるが、2面に面取り加工が施されており、さらに赤色顔料の塗布が認められること等から、縄掛突起の可能性



第61図 1号墳出土組合式家形石棺鑿状工具痕拓影

もある。eは残存高60.3cm、幅10.2cm、厚さ8.5~10.8cmをはかる棺身長側辺部片と思われる、幅4.0~6.0cm、高さ約2.0~4.0cmの断面凸状の組合せ部を有する。凸部は短側辺部の溝状列り込み部の形状に一致する。凸部上端から反対側約12.0cmの面には加工された平坦面が確認でき、長側辺部も少なくとも2枚継ぎ以上で構成されていることがわかる。ただし、石材幅は10.0cmと幅狭く、短側辺部との隙間を埋めるために使用された補助的な石材と考えられる。

以上から玄室内に安置されていた組合式家形石棺は、棺蓋上部平坦面幅の広い板状棺蓋を有する石棺で、側辺部は短側辺部が長側辺部を挟み込む形式と考えられる。底石は出土していないが、石棺高は、長側辺部片と棺蓋部から推定して0.8m以上はあったと推察する。長さに関しては、棺床と考えられる玄室奥壁側の円礫敷設範囲が約2.5mであることから、2.0m前後と思われる。石棺の配置方法については、玄室幅が最大1.8mと狭長であることや玄室奥壁側中央部に遺物の空白域があること、また、円礫敷設範囲が奥壁側2.5m以内に限定される等の点から、長側辺部を石室主軸に平行させて安置していたと推察する。



第62図 1号墳出土組合式家形石棺実測図



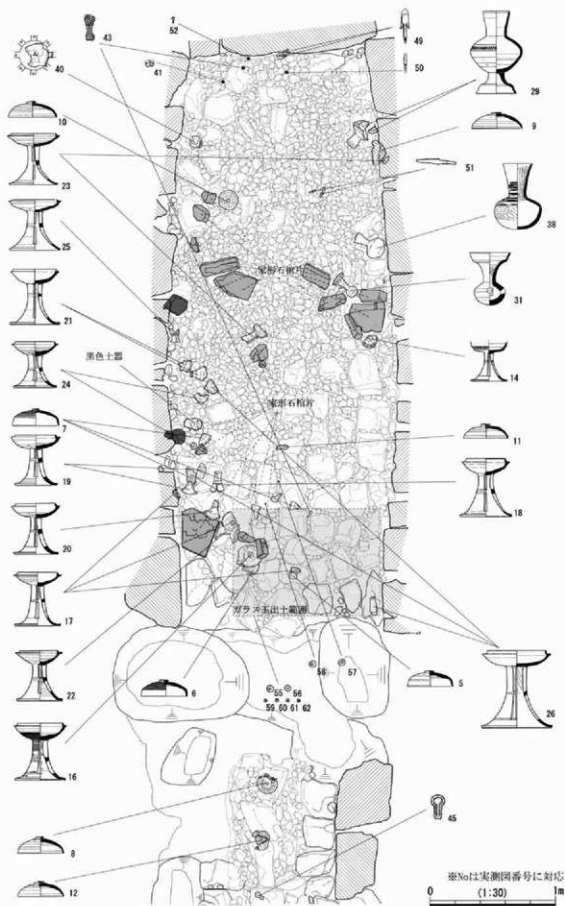
**遺物出土状況** 石室内は、組合式家形石棺が破砕され持ち出されていたことや、後世の出土遺物の存在等から、副葬品の遺存には期待していなかったものの、玄室内は後世の乱掘を免れており、予想以上に多くの副葬遺物が残されていた。石室内及び墓道周辺部からは、先述の凝灰岩製組合式家形石棺の他、馬具・武器・玉類・土器（須恵器・土師器）をはじめ、石室再利用時の遺物である、黒色土器・土師器・瓦器・銭貨等も出土した。

個々の遺物の出土状況を概観すると、まず馬具（轡1対・雲珠1・座金具1・兵庫鎖1・鈎具1）のうち、雲珠（40）、座金具（41）、鐘兵庫鎖（43・44）は、いずれも破損した状態で玄室奥壁寄りの床面上から出土した。このうち雲珠は、雲珠細片や金銅張部分の剥落した破片及び座金具がいずれも奥壁付近で集中して出土していることから、厳密には原位置から移動しているものの、当初から玄室奥壁寄りに置かれていた可能性が高い。兵庫鎖は、玄室奥壁左側壁寄りの床面上及び漢門部付近で細片化したものが出土しており、散乱した状態であるが、破片の多くは玄室奥壁寄り出土した。鈎具（45）は漢道部床面上で原位置を動いた状態で出土しており、盗掘時あるいは再利用時に移動されたものと思われる。

以上の馬具類に関しては、厳密には原位置を移動した状態ではあるものの、概ね玄室奥壁寄り出土する傾向が認められ、当初から玄室奥壁寄りに副葬されていた可能性が高い。轡（42）は墳丘外から出土したが、付近に他の古墳が見られないことから、1号墳石室内の副葬遺物であったものが、盗掘時に墳丘外に投げ捨てられたものと思われる。なお、鐘を構成すると思われる金具のうち、鐘と鐘に繋がるU字形金具等の出土はなかった。

次に、武器・金属製品（鉾1・石突1・環状金具1・鉄鍔2・刀子1・鉄鉾1）をみると、武器類のうち、鉾（46）、石突（47）、環状金具（48）は、攪乱層中や石室外の墳丘東側斜面で出土しており、先述の轡と同様に、盗掘者により石室外へ持ち出された状況を示していると考えられる。鉄鍔（49・50）は玄室奥壁際で出土しており、原位置により近い状態と想定できようか。刀子（51）は石棺安置箇所と想定される玄室奥壁側中央部の遺物空白域で出土しており、棺内遺物であった可能性が高い。鉄鉾（52）は、玄室奥壁寄りの床面上から出土した。ガラス玉（55～62）は、大半が玄門部敷石目地間で出土しており、棺内に副葬品として納められていたものが、石棺破砕時に掻き出された可能性がある。

土器類には、須恵器（杯身3・無蓋高杯2・有蓋高杯11・ハソウ1・台付長頸壺1・直口壺1・短頸壺1・壺1・甕4等）、土師器（長頸壺1、小型甕1、長胴甕片数点）があり、一般に後期古墳で多く出土する杯は1点のみにとどまり、代わりに有蓋高杯が多数出土する傾向が認められる。このうち、有蓋高杯は合計11セット出土したが、その大半が玄室右側壁際、特に右袖部付近の床面上に集中して出土しており、左側壁際ではわずかに高杯蓋が1点出土したにすぎない。したがって、盗掘や片付け等の2次的移動を考慮しても、これらは最終埋葬時に右袖部に集中して置かれていた可能性が高いと考えられる。また、これと対をなすように、ハソウ（31）、台付長頸壺（29）、土師器長頸壺（38）等の特殊製品とも呼べる一群と無蓋高杯（14）



第63図 1号墳石室内遺物出土状況平面図





第65図 1号墳玄室内遺物出土状況



第66図 1号墳玄室左側壁部遺物出土状況 (西から)



第67図 1号墳玄室右袖部遺物出土状況 (北から)



第68図 1号墳玄室奥壁部鉄鏃出土状況 (南東から)



第69図 1号墳後道部遺物出土状況 (西から)

は玄室左側壁に沿って列をなすように出土しており、原位置により近い状況と思われる。これらに関しても、最終埋葬時に玄室左側壁寄りに置かれていた状況が窺えよう。この他、羨道部玄室寄りの床面上から完形の有蓋高杯蓋2点(8・12)、墓道排水溝蓋石上面から、完形の大型有蓋高杯蓋(13)が正置した状態で出土した。このうち大型有蓋高杯蓋は、初葬段階の墓道埋戻し土下面から出土し、これとセットをなす大型有蓋高杯(26)が玄室内で出土していることから、初葬段階の墓道埋戻し前に、玄室内から高杯蓋のみ意図的に持ち出して埋置したと考えられ、墓道埋戻し前に墓前祭祀に伴い据え置かれた土器と思われる。一方、羨道部床面上で出土した有蓋高杯蓋2点も、セット関係の高杯が玄室内で出土していることから、高杯蓋のみ玄室内から意図的に持ち出して、羨道部床面に据え置いたと考えられるが、これが墓道内の祭祀と同様の意味をもつ土器なのか、追葬時に頭蓋等を置く枕に転用されたものなのか明確でない。また、奈良県広陵町牧野古墳例<sup>9)</sup>のように、木製容器の蓋に転用された土器であったかもしれないが、これについては明確にし得なかった。

墓道及び墓道周辺部においては、須恵器甕(35・36・37)や土師器甕(39)等の破片が出土した。このうち甕(35)は、胴部復元径1.0m、器壁厚1.0cmを超える大型品であるが、細片化した破片が墓道を中心に300点以上も出土しており、明らかに人為的に破砕されて埋置された土器と考えられる。出土箇所は先述の大型有蓋高杯蓋(13)出土層の上位0.1m付近に集中しており、初葬段階の墓道埋戻し途中に墓前祭祀に伴い破砕されて埋め置かれたものと推察する。なお、同一個体の破片が玄室内で数点出土しているが、復元径1.0mもある大型甕を、狭い墓道から石室内に入れ込むことは困難であり、墓道内で一端破砕して細片化したものを玄室内に据え置いたものと推測する。なお、墓道から15m離れた周溝北西部においても同一個体の甕の破片が10点出土しており、墳丘構築直後の比較的早い段階の堆積層から出土していることから、周溝内にも甕の破片を散布した可能性が考えられよう。

この他、同じく墓道周辺で、須恵器大型器台片(32)や土師器小型甕、土師器の長胴甕と見られる破片も数点出土したが、いずれも墓道肩部や墳丘斜面で出土しており、これらは盗掘時に墓道が掘り返された際に掻き揚げられたものと考えられる。



第70図 1号墳墓道内高杯蓋出土状況(南東から)



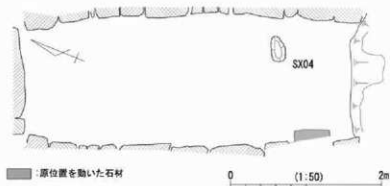
第71図 1号墳墓道掘削作業風景(北西から)

なお、古墳築造以降の遺物としては、瓦器(65)、土師皿(64)、黒色土器(63)、銭貨(66~70)があり、このうち瓦器は石室内第5層中から、土師器・黒色土器は床面直上から出土した。

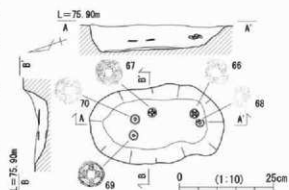
土師器・黒色土器は、いずれも10世紀後半代のもので、

この時期に石室が埋葬施設等に再利用されたか、あるいは祭祀の意味合いで据え置かれた土器の可能性があるが、同一面で石棺が持ち去られていることを踏まえ、この時期、石材採取を目的とした盗掘が行われ、この際、石棺を持ち去ることの代償行為として、土器を入れ込む行為等が行われた可能性が考えられる。

**石室再利用時の遺構 SX04** 玄室敷石床面より上位約0.25mで検出した、長さ0.36m、幅0.2m、深さ0.07mの平面楕円形の土坑である。検出面は床面遺物が隠れる程度に明黄褐色極細砂が敷き入れられており、明黄褐色極細砂は人為的な整地層の可能性が高い。埋土は黄褐色極細砂1層で、銭文を上にした銭貨5枚が埋納されていたが、一部掘り下げた状態で検出したため、本来6枚の六道銭であった可能性も残る。性格不明だが、埋土に焼土や骨片は認められなかったため、追善供養等に伴い埋め置かれたものかもしれない。中世~近世前半頃の遺構と推察する。なお、SX04検出面上において、崩落した側壁石材が出土していることから、銭貨埋納時まで石室は崩壊することなく、何らかの形で再利用されていた状況が窺える。



第72図 1号墳玄室内SX04検出面平面図



第73図 SX04実測図



第74図 SX04検出状況(南西から)



第75図 SX04銭貨出土状況(西から)

## (6) 出土遺物

出土遺物には、①須恵器、②土師器、③馬具、④武器、⑤その他の鉄製品、⑥装身具、⑦古墳時代以降の遺物（黒色土器・土師器・瓦器・銭貨）がある。

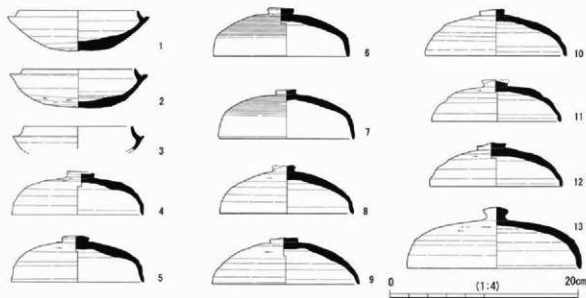
①須恵器 須恵器には、杯身3・無蓋高杯2・有蓋高杯11・ハソウ1・直口壺1・短頸壺1・壺1・台付長頸壺1・器台1・寛4点等があり、この他、細片のため図化しなかった型式不明の破片が10点程ある。

**杯身（1・2）** 口径11.4～12.5cm、器高4.0～4.3cmをはかり、いずれも底部を回転ヘラケズリ、外面から内面にかけては回転ナデを施す。3も杯身かと思われる。

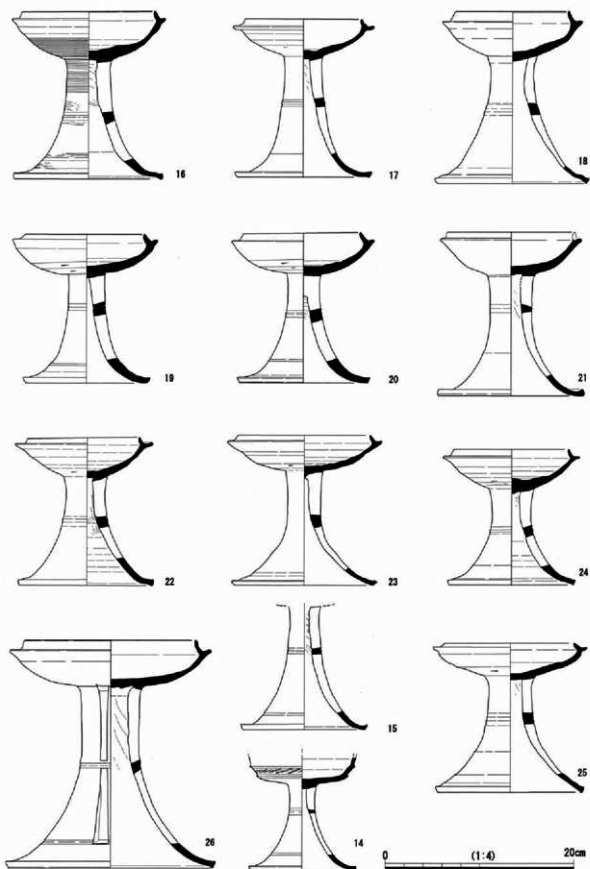
**有蓋高杯蓋（4～13）** いずれも扁平なつまみがつく。口径14cm前後のもの（4～8、11・12）、15cm前後のもの（9・10）、18cm前後と大きいもの（13）があり、器高は13が6.5cmである以外は、4～5.0cm前後におさまる。いずれも天井部外面の2/3程度を回転ヘラケズリ、口縁部から内面にかけては回転ナデを施すが、6と7のみ天井部にカキメを施す。

**無蓋高杯（14・15）** 14は脚部に長方形透し孔を上下2段2方向に穿ち、杯部外面の区画内に宛描列点文を施す無蓋高杯である。杯部・脚部内外面は回転ナデを施す。15は脚部径12.9cmの無蓋高杯の脚部片で、長方形透し孔を上下2段3方向に穿つ。杯部・脚部内外面はナデ調整。

**有蓋高杯（16～26）** 全て長脚2段透しの高杯で、脚部の長方形透し孔が上下2段2方向のもの（16～25）と上下2段3方向のもの（26）がある。いずれも口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。口径は12～13cm前後のもの（17～20・22・24）、14cm前後のもの（16・21・23・25）、17cm前後のもの（26）がある。25は焼け歪みが著しい。調整手法は、16が杯底部から脚部外面にかけてカキメを施す以外は、脚部内外面を回転ナデ調整、杯部は主に底部付近を回転ヘラケズリ、口縁付近から内面にかけては回転ナデを施す。なお、口径・焼成・色調胎土等の諸特徴から、少なくとも大型高杯蓋13と大型高杯26、高杯蓋6と高杯20、また高杯蓋7と高杯



第76図 1号墳出土土器実測図①



第77图 1号墳出土土器実測図②

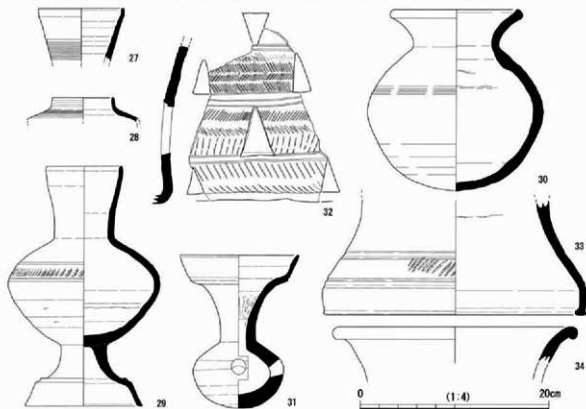


19がセットになると考えられる。

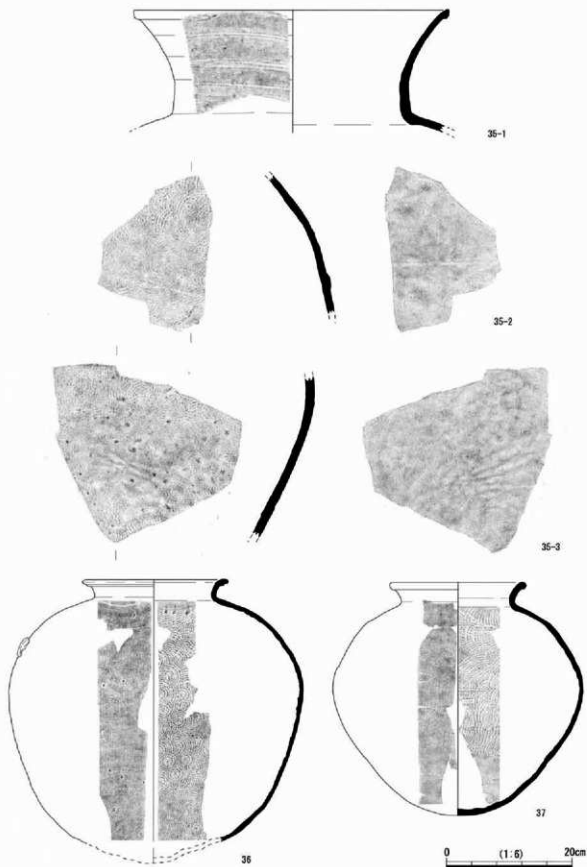
壺 (27・28・30) 27は直行壺の口縁部片かと思われる。上外方に開く口縁をもち端部は丸く内湾する。口縁部外面に1条の沈線を巡らす。内外面ともに回転ナデを施す。28は復元径6.3cm、残存高2.5cmをはかる、短頸壺あるいは脚付短頸壺片かと思われる。口縁部はやや内傾して立ち上がる。外面はカキメのち回転ナデ、内面は回転ナデを施す。30は口径13.0cm、体部最大径18.7cm、器高19.2cmをはかる壺である。球形の体部をもち、「く」字状に外反した口縁をもつ。体部中央からやや上位に2条の沈線が巡る。体部外面中央部のやや下位から頸部にかけてカキメのち回転ナデ。体部面下半部から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。口縁部内外面から体部内面にかけては回転ナデ、内面見込み部付近は不定方向のナデを施す。

台付長頸壺 (29) 口径7.8cm、器高25.5cm、底径12.4cmをはかる台付長頸壺である。やや肩の張る扁平な体部をもち、口頸部は直行気味に外上方に開き、端部はやや内湾する。体部外面には篋描列点文を施す。口頸部内外面から体部外面上半部及び脚部内外面は回転ナデ、体部外面下半部には回転ヘラケズリを施す。脚部に透し孔は認められない。

ハソウ (31) 偏球形の体部に外上方に開く口縁をもつ完形のハソウである。口径12.4cm、器高16.2cm、体部最大径は9.6cmをはかる。体部外面下半部は回転ヘラケズリ、上半部は回転ヘラケズリの後回転ナデ、頸部から口縁部内外面には回転ナデを施す。体部中央やや上方に焼成前に円孔が穿たれる。なお、円孔を穿った際の粘土が体部内面に残されており、振ると、土鈴のような鈍い音で「カラカラ」と音がする。意図的なものであるかもしれない。



第78図 1号墳出土土器実測図③



第79图 1号墳出土土器实测图④

**器台 (32)** 脚部に三角形透し孔が3段千鳥状に穿たれる器台脚部片である。外面に櫛描波状文と列点文が施される。内面はナデを施す。33は器台脚部片あるいは台付壺の脚部片かと思われる。底部復元径27.2cm、残存高12.1cmをはかる。区画内に櫛描列点文を施す。

**甕 (34~37)** 34は口縁部復元径24.8cmで玉縁状口縁をもつ須恵器の甕で、内外面に回転ナデ調整を施す。35は大型の甕である。全形を復元し得なかったが、口縁部復元径が51.4cm、体部最大径が1.0mを超える大型品である。頸部に櫛描波状文を施す。口縁部外面から頸部外面はカキメのちナデ、体部外面は縦位の平行タタキ、頸部外面から口縁部内外面にはナデを施す。36は球形の体部をもつ甕で、外反して端部が肥厚する口縁をもつ。

口縁部復元径22.0cm、体部最大径48.8cm、器高46.0cmをはかる。頸部外面から体部外面は縦位の平行タタキ後、頸部外面から体部外面下半部にかけてカキメを施す。37は玉縁状の口縁をもち、やや肩の張る球形の体部をもつ甕で、口縁部復元径21.6cm、体部最大径40.4cm、器高38.2cmをはかる。体部外面に格子タタキを施し、体部外面上半部はタタキのちカキメ、下半部と底部はナデを施す。

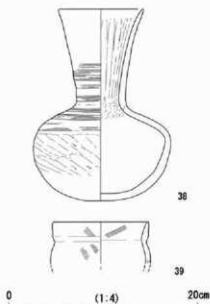
②土師器 土師器には、長頸壺1・小型甕1点等がある。

**長頸壺 (38)** 口径8.8cm、器高20.3cm、体部最大径14.5cmをはかるほぼ完形の長頸壺で、後期古墳で出土する祭具的性格の強いものである。扁球な体部をもち、口頸部は上外方に開き端部はやや外反する。口頸部上半部はヨコナデ、下半部から体部外面上半部にかけては横方向のヘラミガキ、下半部から底部外面にかけてはヘラケズリを施す。

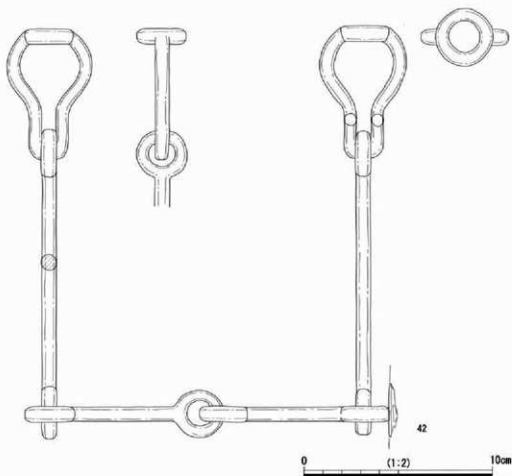
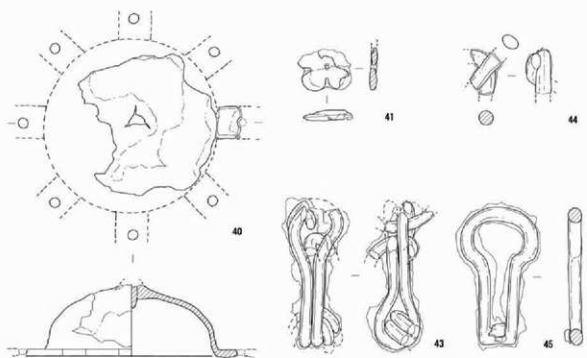
**甕 (39)** 口縁部復元径10.0cmをはかる小型の甕である。直立気味の口縁をもち、口縁部内外面にハケメ、体部内面にヘラケズリを施す。この他、細片化のため図示しなかったが、外面に赤色顔料の塗布された長脚甕とみられる破片も数点出土した。

③馬具 馬具には、有脚伏鉢形雲珠1・座金具1・轡1対・鍔兵車鎖1・鉸具1点及び不明品数点があり、それぞれ重複する製品が認められないことから、単一の組み合わせと考えられる。なお、鍔を構成すると思われる金具のうち、鍔と鍔に繋がるU字形金具等は出土しなかった。

**雲珠 (40)** 鉄地金銅張製の有脚伏鉢形雲珠と思われ、伏鉢部復元径9.2cm、復元高3.8cm、厚さ0.3cmをはかる。明瞭な段は確認できない。脚は1箇所残存するが端部を欠失している。方形脚になるかと思われ、脚部幅は1.7cm、残存長1.5cm、厚さ0.4cmをはかり、直径0.3cmの鉄の脱落した孔が1箇所確認できる。伏鉢部内部から外面頂部にかけては、革帯等を固定したとみられる鉄芯が貫通する。なお、図は脚部幅を踏まえて、8脚の雲珠として復元した。



第80図 1号墳出土土器実測図⑤



第81图 1号出土马具实测图

**座金具 (41)** 鉄地金銅張製もしくは鉄地銀張製の座金具と思われる。残存幅2.3cm、最大厚0.4cmで、平面四葉のクローバー状を呈する。側面は曲線的に成形され断面杏仁形である。中央部に径0.2cmの孔が1箇所確認できる。雲珠に伴う花形の座金具かと思われる。

**書 (42)** 鉄製で、引手壺は全長6.9cmの平面瓢箪形を呈し、壺端部には本体軸に直交した円環がつく。引手側端部には引手円環に直交する連結部がある。円環の直径は2.6cmで断面は円形である。引手は図左側が全長16.4cm、図右側が16.2cmをはかり、いずれも両端に直径2.5cm前後の断面円形の円環がつく。鉄棒部の径は、引手壺の断面径に比べてやや太く0.7cmある。これに連結する銜は金具2本で構成される二連銜である。引手側の円環と連結部の円環は一方が直交し、もう一方が並行に作られている。銜先間の長さは、図左側が10.5cm、図右側が10.2cmで、両銜先間の長さは約20.0cmある。円環は中央部側が引手側の円環に比べてやや小振りで、鉄棒部分の径は引手側とほぼ同じである。なお、図右側の銜先円環外側に鉄板状のものが認められ鏡板の可能性があるが、X線写真でも判然としなかった。

**兵庫鎖 (43・44)** 鎖に繋がる鉄製兵庫鎖で、連結部の状況から三連式の兵庫鎖と思われる。1連あたりの長さは7.8cmある。鎖の断面形は円形である。

**鉸具 (45)** 鉄製鉸具で、全長6.8cm、輪金部幅4.2cm、厚さ0.6cm、断面円形を呈する。刺金を欠失するが、輪金基部にわずかにその痕跡を残す。この他、図示しなかったが、残存長1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmの平面方形の鉄製品が出土した。表面に革とみられる有機質の膜が遺存しており、雲珠脚部片の可能性がある。有機質の膜は、革帯の癒着したものかもしれない。

④武器 武器には、鉄針1・石突1・環状金具1・鉄鎌2・刀子1・不明品が数点ある。

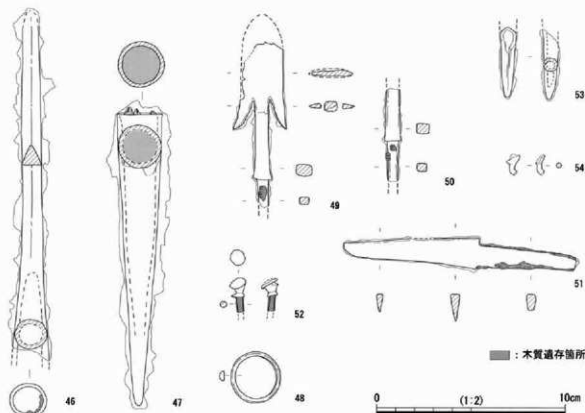
**針 (46)** 残存長17.6cm、刃部残存長13.5cm、袋部径2.0cmをはかり、身部断面が三角形を呈する三角穂式鉄針である。無間で、袋部断面は円形を呈する。袋部内には木柄と考えられる木質が残るが、柄を固定するための目釘の位置はX線写真でも判然としなかった。

**石突 (47)** 全長15.5cm、袋部径2.4cmを測る鉄製の石突である。袋部内には木柄の木質が遺存するが、目釘の位置は判然としなかった。針(46)に伴う石突かと思われる。

**環状金具 (48)** 外径2.7cm、内径2.1cm、厚さ0.5cmをはかる鉄地金銅張製環状金具で、中実である。断面形は外面が丸みを帯び、内面が平坦なカマボコ形を呈する。環状雲珠の可能性も考えたが、48の内径が46の袋部基部外径にほぼ一致するため、46の針袋部基部に装着された装飾金具の可能性が高いと考える。向日市物集女車塚古墳では、袋部基部に銀製環状金具を装着した三角穂式鉄針<sup>9)</sup>が出土しており、48の使用方法を想定する上で興味深い。

**鉄鎌 (49・50)** 49は鎌身部が鉄剣状を呈し、下向きの逆刺がつく平根系脇扶形三角形鎌である。鎌身残存長は4.7cmをはかり、断面は杏仁形である。頸部は長さ4.2cmで、断面長方形を呈し、直角の間をもつ。基部には木質を残す。50は残存長4.7cmの鉄鎌で、基部に木質を残す。

**刀子 (51)** 全長12.5cm、刃身長7.0cm、刀身幅0.5cmをはかる鉄製刀子で両刃である。茎部は長さ5.2cm、茎尻幅0.6cmをはかり、茎の断面は方形である。基部に木質を残す。

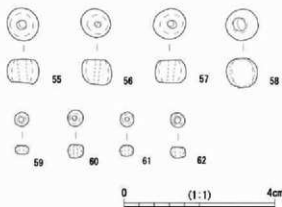


第82図 1号墳出土武器・金属製品実測図

⑤その他の鉄製品 (52~54) 52は残存長1.8cm、頭部径0.8cmをはかる鉄製鉄である。頭部裏面から軸部上端にかけて草とみられる有機物が付着し、これより下部には木質が残る。53は細長い円錐形を呈する不明鉄製品で、内部は中空である。54は用途不明の鉄鋸状の金属製品で、方形の頭部に残存長0.6cm、径0.2cmの軸部をもつ。

⑥装身具 装身具には、ガラス製粟玉と小玉が8点ある。

ガラス玉 (55~62) 55~57はガラス製小玉で、最大径0.75~0.85cm、厚さ0.5~0.6cmをはかる。胴側面はいびつな曲線形を呈し、小口面は平坦だが上下面は平行になっていない。3点とも色調は濃藍色を呈し、いずれも縦方向の気泡列が確認できることから、引き延ばした管を切断する、いわゆる「管切り法」による成形と考えられる。58はガラス玉で、内部が中空であることから、空玉と言ってもよい製品である。最大径0.85cm、最大厚0.8cmをはかる。胴側面・小口面ともに球形で、色調は透明度の高い淡青色を呈する。縦方向の気泡列が確認できる。59~62は粟玉である。いずれも最大径0.35~0.4cm、厚さ0.2~0.3cmで、胴側面・小口面ともに滑らかな曲線形を呈する。色調は59~61が



第83図 1号墳出土ガラス玉実測図

不透明な淡緑色を呈し、62は不透明な黄色を呈する。縦方向の気泡列が確認でき、小王同様、管切り法により成形されていると考えられる。

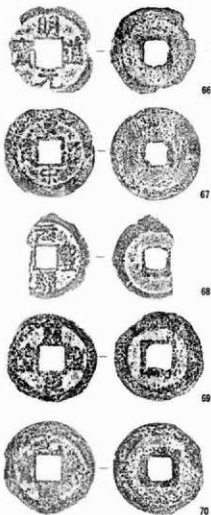
⑦古墳時代以降の遺物 63は黒色土器A類碗で玄室床面上から出土した。内・外面と内面見

込み部にヘラミガキを施す。10世紀後半代の所産。64は「て」字状口縁の土師器皿で、玄室床面直上層から出土した。10世紀後半代の所産。65は瓦器皿で玄室床面直上層から出土した。内面見込み部にジグザグ状の暗文を施す。13世紀代の製品であろう。66～70は、SX04出土の銭貨（銅銭）である。66は明道元寶（北宋・初鑄1032年）で、外径2.4cm、孔径0.7cmをはかる。67は皇宋通寶（北宋・初鑄1039年）で、外径2.4cm、孔径0.6cmである。68は外徑2.2cmの元豊通寶（北宋・初鑄1078年）で、孔径0.5cmである。69と70は、裏表ともに鏽のため銭文の判読が困難だが、69は四字のうち、下は「元」、左は「寶」と読める。外径2.4cm、孔径0.6cmをはかる。70の左は「寶」、上は「元」で、外径2.4cm、孔径0.6cmをはかる。

以上の銭貨のうち、67以外は総じて鑄上りが悪く、模鑄銭の可能性はある。



第84図 古墳再利用時の土器実測図



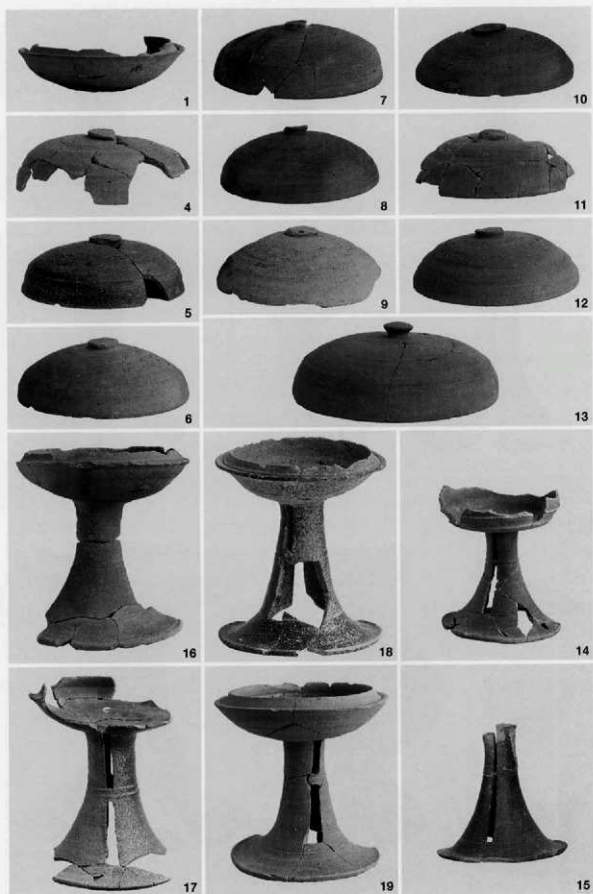
第85図 SX04出土銭貨拓影

## (7) 築造時期

1号墳の築造時期を知る上で指標となる遺物に、須恵器・土師器・馬具・鉄製品・組合式家形石棺等がある。

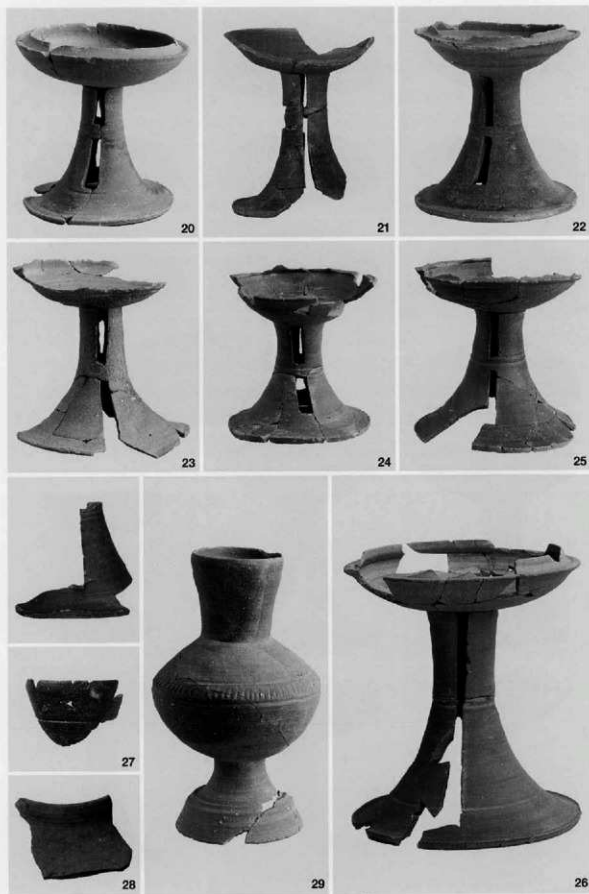
須恵器には、杯身、無蓋高杯・有蓋高杯等があり、高杯は長脚2段透しで、脚部の長方形透し孔が2段3方向と2段2方向のものが相伴しており、形態は陶邑TK209型式併行期でも古相に位置付けられる奈良県広陵町牧野古墳出土例<sup>36)</sup>に似る。杯身や台付長頸壺・ハソウ及び土師器長頸壺等もTK43～209型式併行期とみて大過あるまい。馬具・鉄製品では、TK43型式併行期以降に、鑄式の鉄銚に代わって盛行する三角徳式鉄銚が出土しており、他も概ね6世紀後半以降の製品とみられる。組合式家形石棺は、全形が不明ながら、棺蓋上部平坦幅が広い板状棺蓋をもち、棺各部の構成材が薄手で複数枚で構成されている等、組合式家形石棺でも後出的要素が強いと思われる、7世紀前半代の製品と推察する。

以上から、1号墳の築造時期は、7世紀初頭を中心とした時期とみて大過ないものと思われる。

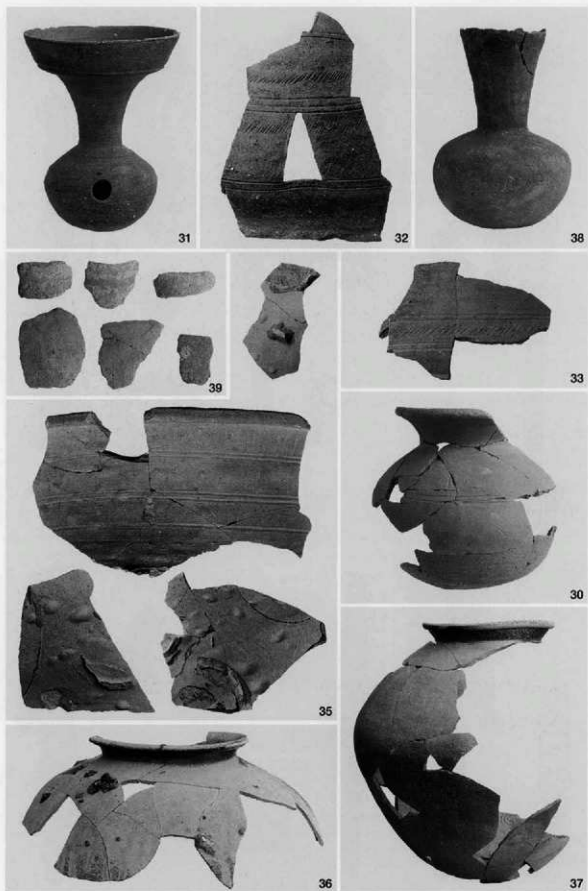


第86图 1号墳出土土器①





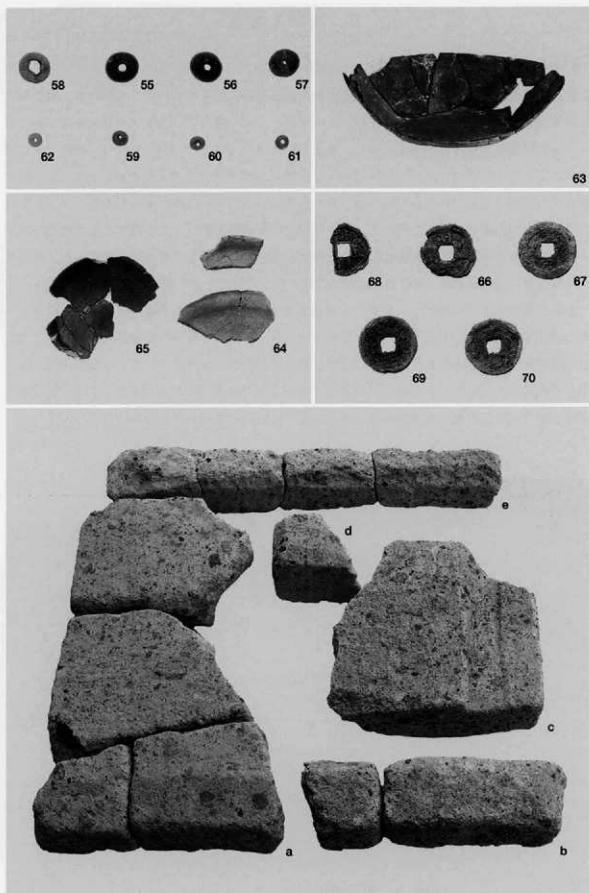
第87图 1号墳出土土器②



第88图 1号填出土器③



第99圖 1号墳出土馬具・金屬製品



第90図 1号墳出土ガラス玉・組合式家形石椁・銭貨等

## 6 堀切2号墳

1号墳の峰続き南方約30mの尾根上に位置する古墳で、大正期の石材採取に伴い1号墳と同じ運命を辿ったらしいことが、過去実施された踏査記録に記されている。このため、調査前まで横穴式石室を有する後期古墳と想定していたが、今回の調査では、墳丘や石室をはじめとして、盗掘坑等も一切確認できず、また、出土遺物も認められなかったことから、従来古墳と想定されてきた2号墳は、実は古墳ではなく、古墳状の自然地形と考えられる。過去、2号墳を横穴式石室墳と想定した理由としては、おそらくは、基盤層の流出により形成されたとみられる尾根北西側斜面の挿鉢状の窪みを、石材採取後の陥没跡と誤認したことによるものと推察する。したがって、1号墳と3号墳間の尾根筋は、当初から空閑地であったと考えられ、東側丘陵尾根の最高所付近には、1号墳が独立墳的に立地していたと考えられる。

なお、現在はすでに消滅しているため確認するすべはないが、2号墳の西方20mに位置していた堀切3号墳では、大正期の石材採取に伴いヨロイ・剣・土器等の副葬品が出土し、また石室石材が民家に持ち去られたらしいことが、先の踏査記録に記されている。この際の出土品はすでに捨てられたらしいため詳細は不明だが、出土遺物や石材採取の記録から、3号墳に関しては、横穴式石室を有する後期古墳であったことは間違いないものと思われる。



第91図 2号墳全景（北東から）

## 7 堀切11号墳

今回の調査で新たに発見した古墳である。開発計画線が墳丘を東西に2分して通ることや、安全上の諸問題等から、石室内の調査は玄室奥壁部のみにとどめた。

### (1) 墳丘

1号墳の南東約40m、標高約71.0~74.0mの丘陵支尾根上に立地する。尾根筋は南西から北東に向けて急傾斜面が続き、尾根両側面は比較的傾斜の緩やかな谷状地形となっている。古墳は、この急傾斜面から緩傾斜面へと移行する傾斜変換線上の張り出し部に築かれている。墳頂部平坦面には、盗掘坑と見られる掃鉢状の窪みが確認でき、ここから北東側斜面にかけては、北東方向の溝状の擾乱が認められる。この溝状の擾乱は1号墳においても確認でき、石材採取時の作業道と考えられる。大規模かつ計画的に石材が採取されており、1号墳と同時期の大正期に石材採取を目的とした乱掘が行われたと考えられる。

墳丘規模は、墳裾及び各所の傾斜変換線を踏まえると、尾根筋で直径約20m、尾根に直行する方向で直径約22mをはかり、墳形は尾根筋に直行した北西-南東方向にやや長い円墳と考えられる。墳丘高は、周溝最深部から約1.2m、尾根先端部側の北側裾から約3.5mをはかり、尾根先端部側の墳丘裾が低いことから、見掛け上の高さを意識して築造されたと思われる。なお、葺石や埴輪等の外部施設は認められなかった。

周溝は尾根両側面に向かうに従い、浅くなって自然地形に移行しており、基底部幅は2.0m、深さは最大で1.2mをはかる。断面形は底部がやや丸みを帯びる逆台形を呈する。周溝内の埋土は、第1層の黒褐色腐植土(表土)以下、基本的に尾根上部側の基盤層と墳丘流土互層の自然堆積層である。周溝内で遺物は出土しなかった。

### (2) 盛土

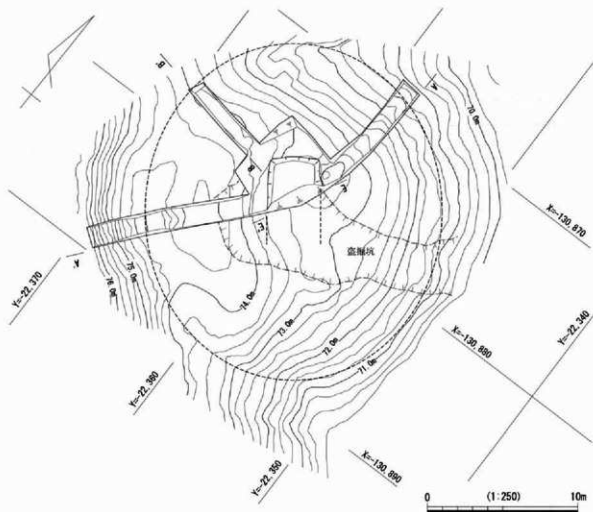
盛土は主に尾根先端部側の墳丘北東側において確認でき、最大で厚さ0.9m分を確認した。盛土は主に旧表土と同質の、にぶい黄褐色系礫混土と明黄褐色系細砂等で構成されることから



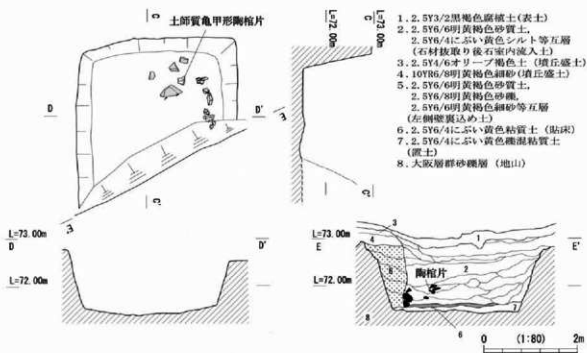
第92図 11号墳調査前風景①(北西から)



第93図 11号墳調査前風景②(南西から)



第94図 11号墳丘測量図



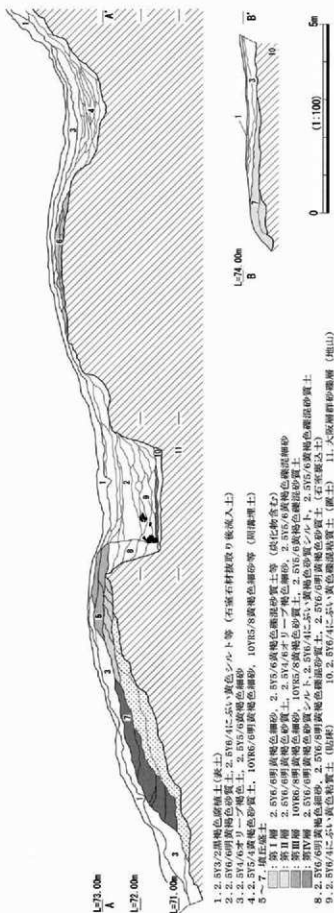
第95図 11号墳石室内土層断面図

1号墳と同様に、尾根上部側を削平した掘削土を用いて、標高の低い尾根先端部側に盛土して平坦面を造成した後、墳丘中心部から墳丘外面側に向けて順次盛土を施して墳丘築成を行ったと考えられる。平坦面造成時の盛土は、締まりの強い明黄褐色系、黄褐色系、にぶい黄褐色系の砂質土及び礫混砂質土等で構成される。第5層の盛土は側壁裏込め土を兼ねているとみられ、墳丘盛土と裏込め土を上下に噛み合わせつつ、水平方向に盛土を行った様子が窺える。

### (3) 埋葬施設

埋葬施設は横穴式石室で、墳丘内での位置や掘り方形状からみて、検出箇所は玄室奥壁部と考えられる。主要石材はすでに抜き取られており、掘り方底面に0.3m大の小型石材と陶棺片が数点残るのみである。掘り方主軸は南から39度東に偏しており、石室主軸もこれに平行すると予想されることから、開口部は南東方向と思われる。視界の悪い南東方向を向く理由としては、1号墳と同様に、石室構築に際して安定した基盤層を求めた結果と推察する。

石室掘り方は、大阪層群の砂礫層を平面箱型に掘り抜いて造られており、基底部検出長3.3m、基底部幅2.6m、深さは最大で1.4mを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。奥壁・両側壁は80度近い急傾斜となっている。左側壁裏込め土の遺存状況は良好で、左右側壁の控えを約0.5mとし



第96図 11号墳墳丘土層断面図



て玄室奥壁幅を推定すると約1.2mとなる。掘り方底面には部分的に粘土による貼床が遺存する。床面標高は71.6mである。貼床に使用した粘土は大阪層群中の淡水性の粘土層と思われる。

石室内埋土は、第1層の黒褐色腐植土（表土）以下、第6層と第7層直上までが石材採取後の石室内流入土（第2層）である。第5層の左側壁裏込土は、非常に締まりの強い明黄褐色砂質土、明黄褐色砂礫、明黄褐色細砂等で構成される。第6層は貼床で、非常に締まりの強いにぶい黄色粘質土である。第7層も第6層とはほぼ同質だが、若干礫が混じり、裏込め土の下面まで連続することから、基底石設置以前の置土であると考えられる。

掘り方底面と第2層中からは、須恵器高杯と土師質亀甲形陶棺が破砕された状態で出土した。いずれも原位置を保つものはない。陶棺は全形を復元できるだけの破片数は出土していないが、量及及び焼成・色調・胎土等の諸特徴からみて、単一個体と考えられる。したがって、本古墳玄室内に、土師質亀甲形陶棺が1棺安置されていたと考えられる。

#### （4）出土遺物

出土遺物には、須恵器高杯脚部片1点と土師質亀甲形陶棺片が20点ある。なお、須恵器高杯は、細片化しているため図化し得なかったが、長方形透し孔を有する長脚2段透し高杯の脚部片である。以下、土師質亀甲形陶棺について述べる。

1～11は、円筒形脚をもち、棺身・棺蓋部からなる土師質亀甲形陶棺である。棺身外表面には横方向及びこれに直交する縦方向の突帯がみられ、いずれも突帯間幅の判明する資料はないが、棺身・棺蓋部の横方向突帯間はいずれも12cm以上、棺蓋部の縦方向突帯間は16.5cm以上、棺身部縦方向突帯間は14.0cm以上ある。したがって、棺身・棺蓋部は少なくとも上下2段以上に区画され、あるいは3段に区画されている可能性がある。棺蓋部は円形・楕円形透孔が3箇所以上穿たれる。棺身受け部及び棺蓋部には断面台形状の鑿部が認められる。脚部は円筒形で、列数・行数等は不明であるが、中位に円形透孔を1対穿つ。器壁厚は棺蓋部が1.3～1.5cm、棺身部は1.2～1.8cm、脚部は0.7～1.3cmある。棺身受け部鑿部の突出長は3.2cm、棺蓋鑿部の突出長は3.6cm、円筒形脚部は底径13.7cm、高さは9.0cm程度ある。棺蓋頂部の突帯幅は2.5cm、厚さ0.8cmで、棺身突帯幅は1.5～2.5cm、厚さは0.6～1.2cmある。器壁外面は平行タタキ後に主にユビナデ、内面はナデ及びユビオサエと同心円紋当て具痕が残る等、須恵質陶棺の製作技法に共通する点の特筆できる。突帯は、基本的に横方向の突帯貼付け後に縦方向の突帯を付加する。接合部はユビオサエ及びナデを施す。突帯外面は、板状工具による押圧とナデにより平滑に仕上げられている。赤色顔料塗布の有無については不明である。焼成は土師質というより、むしろ瓦質に近い硬質な焼きで、色調は内外面ともに黒褐色を呈する。

1は棺蓋頂部片、2～4は棺蓋中位突帯付近の破片と考えられる。2には推定で直径7.0cm、3・4には推定で直径約5.0cmの円形あるいは楕円形透孔が穿たれる。4の透孔付近には、ヘラ状工具による3条の平行した線刻が確認できる。5は棺蓋長側端部の下端部片、6は棺蓋下端部片の鑿部である。7は棺身受け部で、受け部内面には土師質亀甲形陶棺に通例の広葉樹の木



第97図 11号墳全景（南西から）



第98図 11号墳石室内土層断面（北西から）



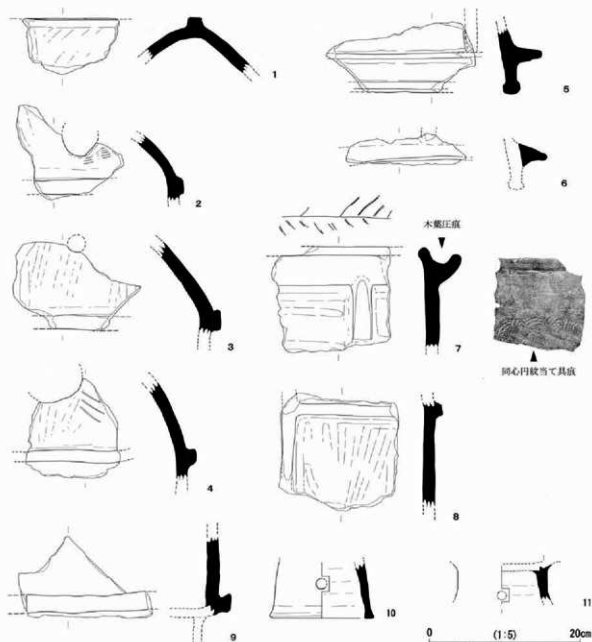
第99図 11号墳周溝土層断面（北東から）



第100図 11号墳石室玄室掘り方検出状況（南東から）



第101図 11号墳玄室内陶器出土状況（南から）



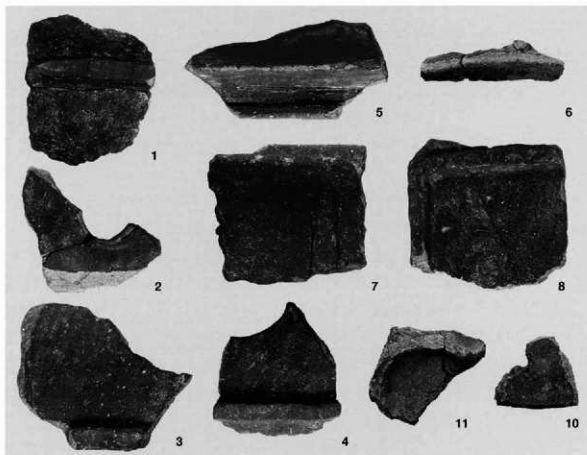
第102図 11号墳出土土師質亀甲形陶棺実測図

葉圧痕が残る。8は棺身中位突帯付近で小口コーナー部片とみられる。9は棺身長側辺部の下端部片、10・11は底部に向けやや裾広がりとなる円筒形脚部片である。

### (5) 築造時期

11号墳の築造時期を想定し得る遺物に、須恵器高杯と亀甲形陶棺がある。このうち高杯は、長方形透し孔を有する長脚2段透しの脚部片で、6世紀末から7世紀前半の製品と思われる。

南山城は、畿内最大の土師質亀甲形陶棺分布地の北大和に近接し、土師質亀甲形陶棺が比較的多く出土する地域である。南山城において、11号墳以外に土師質亀甲形陶棺が出土した例は、管見にのぼるものでは、京田辺市宮の口4号墳<sup>20</sup>、宇治市伊勢田塚古墳<sup>21</sup>（亀甲屋根形）、同菟道門ノ前古墳<sup>22</sup>、城陽市冑山5号墳<sup>23</sup>、同青谷古墳<sup>24</sup>、井手町平山古墳<sup>25</sup>、精華町鞍岡山<sup>26</sup>等



第103図 11号墳出土土師質亀甲形陶棺

にある。これらは、後述する須恵質陶棺を含めて、概ねTK43～TK217型式併行期の横穴式石室墳から出土している<sup>28)</sup>。当古墳は突帯間幅の判明する資料がなく、全形を復元するのが困難だが、棺身・棺蓋部の表面区画が方形で、円筒形脚部を有する等の諸特徴は、北大和・南山城の他の陶棺と一致する<sup>29)</sup>。一方で、細部の特徴を見ると、棺蓋鋸部の形状が他の陶棺には確認できない等の特徴があり、また棺蓋・棺身部が上下2段以上に区画され、あるいは3段になる可能性もあり、明確でない。推定復元図(第104図)では、棺身・棺蓋部ともに3段区画で復元したが、今後、須恵質陶棺との技術系譜的な面も含めて、周辺地域とさらに比較検討を行う必要がある<sup>30)</sup>。

北大和・南山城地域の土師質亀甲形陶棺は、概ね6世紀後葉に出現し、7世紀前葉に終末を迎え、以後、須恵質陶棺に替わっていきと考えられている<sup>31)</sup>。また、畿内の亀甲型陶棺は、6世紀後半に出現する土師質亀甲形陶棺から6世紀末の須恵質亀甲形陶棺を経て、7世紀初頭に須恵質四注家形陶棺へ移行するとの見解<sup>32)</sup>が示されており、11号墳は7世紀初頭から前半頃の製品と推察する。

以上から、追葬の有無は不明であるが、11号墳の築造時期は、概ね1号墳にやや遅れた7世紀初頭から前半頃と考えたい。



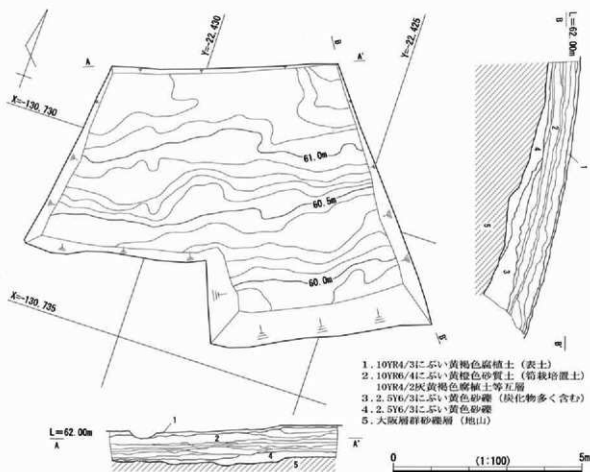
第104図 陶棺推定復元案

## 8 第2調査区

東側丘陵尾根末端部の標高約60.0～62.0mに位置する調査区である。試掘調査及び現況測量時に墳丘状の高まりがみられたことや、古墳時代の須恵器が少量出土したことから、古墳あるいは横穴等の存在を予想して調査に及んだものの、この墳丘状の高まりは、近代以降の荷栽培の置土により形成された隆起と判明した。したがって、当調査区においては、古墳や横穴等の検出には至らなかった。

調査区内の基本土層は、第1層の腐植土（表土）以下、第2層がふい黄褐色砂質土と腐植土の互層、第3・4層が近代以降の遺物を含むふい黄褐色砂礫となっている。

遺物は主に、第2層と第3・4層中から古墳時代の須恵器及び近代以降の陶磁器が数点出土したが、いずれも細片化しており図化し得なかった。古墳時代の須恵器の出土は、かつて調査区周辺に横穴あるいは古墳等が存在していたことを示唆するものであろう。なお、第2調査区周辺では、調査区南東側に堀切1・2号横穴、東側には堀切10号墳が位置していたが、後世の土取り等の影響により、現在は残念ながらいずれも破壊され、前者は消滅、後者は半壊の様相を呈している。



第106図 第2調査区実測図



第106図 第2調査区全景①(南東から)



第107図 第2調査区全景②(南西から)

## 9 まとめ

今回は堀切1・2・11号墳の発掘調査を行い、墳丘や内部構造及び副葬遺物等について多大な成果を得ることができた。特に堀切1号墳において、従来不明確であった堀切古墳群の古墳の墳丘構造や内部構造が知り得たことは特筆でき、当古墳群や周辺の後期古墳の実態解明にとって重要な知見を得ることができたと考える。以下、今回の調査成果を整理し、基礎的な分析を行うことで本報告のまとめとしたい。

### ①調査概要

**1号墳** 東側丘陵尾根上に立地する、直径約22m、高さ約2.7～2.9mの円墳である。埋葬施設は南南東に開口する両袖式構造の横穴式石室で、全長約9.3m、玄室長4.60m、同奥壁幅1.37m、同最大幅1.80m、同推定高2.3m、羨道部長約4.70m、羨道部幅1.06mをはかり、羨門部から墳丘斜面にかけて、全長5.6mの切り通し状の墓道が延びる。

石室は近隣の手原川流域で採取したホルンフェルスを中心に築かれており、玄室左右側壁が3～4段分遺存していた。奥壁は高さ1.8mの巨大な花崗岩の一枚石を基底石に据えている。玄室及び羨道部床面は、扁平な河床礫を敷き詰めた敷石で、玄室奥壁側半分は、敷石上にさらに円礫を敷き詰めた礫床である。羨門部から墓道にかけては、石組の暗渠排水溝が埋設されており、非常に完備された石室を有している。玄室礫床上で凝灰岩製組合式家形石棺が出土しており、玄室内に二上山白石の組合式家形石棺1棺が安置されていたと考えられる。

組合式家形石棺が初葬と考えられるが、追葬の有無については明確にし得なかった。出土遺物には、上記組合式家形石棺の他、馬具・武器・装身具・土器等があり、築造時期はTK209型式併行期の7世紀初頭を中心とした時期と思われる。

**2号墳** 1号墳の南方約30mの尾根上に立地すると想定されてきた古墳であったが、今回の調査では、墳丘や石室は一切確認できず、また遺物の出土も皆無であったことから、2号墳は古墳ではなく、古墳状の自然地形と考えられる。

**11号墳** 今回新たに発見した古墳である。1号墳の南東約40m、標高71.0～74.0mの丘陵支尾根上に立地し、尾根筋で径20m、尾根の直行方向で径22mを測る円墳である。埋葬施設は南東方向に開口する横穴式石室で、石材はすでに抜き取られていたため、詳細な石室規模は不明だが、玄室裏込土と貼床が遺存しており、玄室幅は約1.2mと推測される。

玄室内から土師質亀形陶棺等が出土しており、玄室内に土師質亀形陶棺1棺が安置されていたと考えられる。築造時期は、1号墳にやや遅れた7世紀初頭から前半頃と思われる。

**②組合式家形石棺** 1号墳出土の凝灰岩製組合式家形石棺は、二上層群下部ドンズルポー層凝灰岩、いわゆる二上山白石の組合式家形石棺で、縄掛突起の有無については明確でないが、箱型で扁平な板状棺蓋を有する点が特徴的と言える。京都盆地において、このような板状棺蓋を有する凝灰岩製組合式家形石棺は、他に、向日市物集女車塚古墳<sup>30</sup>(二上山白石：MT85型式

期)と京都市右京区大覚寺3号墳<sup>36</sup>(竜山石:TK209型式期)で出土しており、いずれも当古墳と比較すると、棺蓋厚や棺各部の構成枚数等が異なる。ただし、棺蓋上部平坦面幅指数は、前者が76~84、後者が87を示し、当古墳の75~86<sup>36</sup>に近似した値を示す。なお、通常、削り抜き式家形石棺では、時期が下るにつれて、平坦面幅指数が増加する傾向が明らかにされているが、組合式家形石棺ではこれとは反対に、時期が下るにつれて指数が減少する型式もみられるため、削り抜き式石棺の平坦面幅指数の時間的な変化を組合式石棺に安易に適用できないことが指摘されている<sup>36</sup>。このため、突起の有無が不明な当古墳の製作時期を平坦面幅指数のみで決めることは困難だが、棺蓋平坦面幅指数の近似した値の大覚寺3号墳は、追葬時の7世紀初頭の製品であり、また、当古墳が棺蓋と棺身長側辺部が2枚継ぎ以上で、棺各部の構成材が薄手である等の諸特徴は、組合式家形石棺でも後出的要素が強いと思われることから、概ね7世紀初頭を中心とした時期の製品と推察する。

京都盆地における凝灰岩製家形石棺は、現在までに30例以上確認されている<sup>37</sup>が、その8割以上が兵庫県加古川流域産の竜山石製であり、二上山白石製組合式家形石棺は、近隣の和・河内地域に比べると極めて出土数が希少である地域的特色が認められる。管見にのぼるもので、二上山白石製組合式家形石棺は、先述の物集女車塚古墳の他、長岡京市今里大塚古墳<sup>38</sup>(組合式:TK217型式期)、京都市音戸山5号墳<sup>39</sup>(組合式:7世紀前半)と本古墳出土棺の4棺のみであり、宇治以南の南山城地域での出土は今回が初である。これらは、6世紀中頃の物集女車塚古墳以外は、概ね7世紀初頭から前半代の古墳で出土する傾向が認められるようである。

**③堀切古墳群の群構成と内部構造** 当古墳群は、軟弱な大阪層群を基盤に築かれており、斜面の流出や後世の擾乱等により、分布調査以前にすでに消滅した古墳も予想されるが、既往の調査を踏まえれば、10基程度の古墳で構成された群集墳と考えられる。

古墳は、被葬者集団の集落跡が予想される薪遺跡を俯瞰した東西2つの丘陵尾根上に分布しており、このうち、古墳かどうかの判断が難しい8号墳と、東側丘陵尾根末端部に単独で立地する10号墳を除けば、大きく東側支群(1・3・11号墳)と西側支群(4・7・9号墳)、及び南側支群(5・6号墳)を小支群として把握することが可能である。これら小支群は、概ね2~3基を1単位に構成されており、墳形が判明するものはいずれも円墳とみられ<sup>40</sup>、墳丘規模は、後述する第1期の7号墳が直径15mと他に比べてやや小型であるのに対し、第2期の1号墳(直径22m)、4号墳(直径20m)、9号墳(直径20m)、11号墳(22m×20m)は、いずれも直径20m前後にまとまり、墳丘規模に顕著な差が認められない特徴がある。石室規模では、1号墳が全長9.3m、玄室長4.6m、羨道部長4.7mで古墳群中最大規模の石室を有し、以下、規模の大きい順に、玄室長3.5mの9号墳、玄室幅1.2mの4・11号墳が続く。石室形態は1号墳が両袖式である以外、他は不明である。次に床面構造では、全面に敷石を施し、石組排水溝を有する等の完備した石室をもつ1号墳と、玄室内のみ置土を敷き入れ円礎を敷く9号墳、置土と貼床で床面を形成する11号墳があり、個々の古墳の床面構造に明確な格差が認められる。なお、



4号墳も玄室部のみ深く掘り下げられているため、玄室床面は置土で形成されていた可能性が高い。

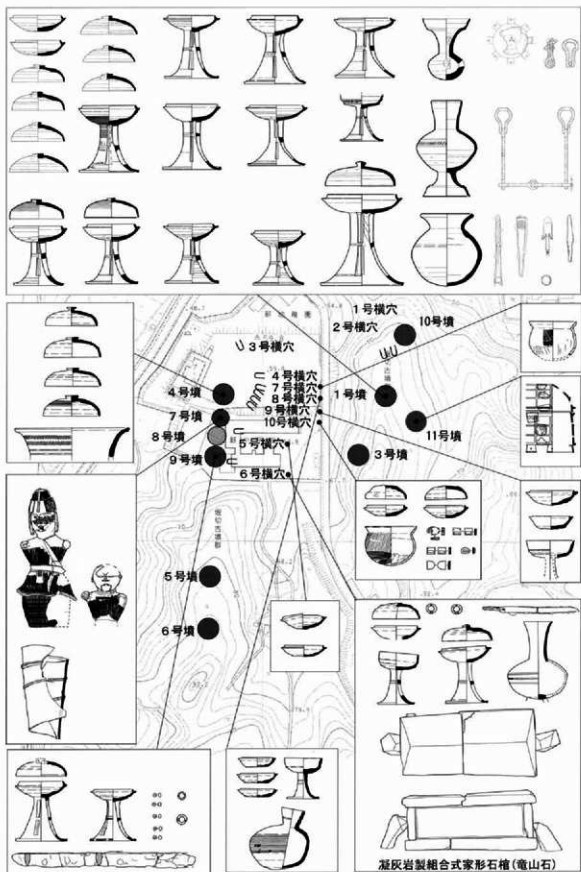
上記4基の古墳の床面構造の格差は、棺の種類・材質にも反映していると考えられ、最も完備された石室の1号墳に二上山産凝灰岩製組合式家形石棺、9号墳に板石状石材による組合式箱形石棺、11号墳に亀甲形陶棺を安置しており、その他、木棺等の埋葬方法も想定できることから、石室規模や床面構造の格差に伴い、棺の種類・材質の選択が行われたと考えられよう。

この状況が、副葬品の種類や多寡を含めて、古墳群全体に一定の規範として存在していたかどうかは明確でないが、少なくとも当古墳群では、墳形や墳丘規模よりも内部構造を重視し、石室規模や床面構造、棺の種類・材質の階層序列に従って、古墳の設計・築造が行われたと考えられる。この序列がすなわち被葬者の階層差を反映した結果であると想定できよう。なお、こうした状況は、横穴群でも同様であり、横穴群中最大の玄室を有する6号横穴のように、木炭敷上に礫を敷き詰め、その上に凝灰岩製組合式家形石棺（竜山石）を安置する厚葬を行う横穴がある一方、置土や敷石を施さず、棺台石上に木棺を置く例（7～10号横穴）、直葬する例（4・5横穴）があり、各横穴間に玄室規模や床面構造、また棺の種類等に格差が認められる。

④堀切古墳群の古墳の動向と築造順位 ここでは以上を踏まえた上で、各支群の築造順位と動向についてみていきたい。まず東側支群では、尾根最高所からやや下った尾根稜線上に1号墳、1号墳南の丘陵腹部に3号墳、1号墳南東約40mの支尾根上に11号墳が立地する状況である。このうち11号墳は、1号墳南に古墳築造可能な空地を残すにも関わらず、1号墳よりあえて低位置に1号墳と開口部を揃えて占地しており、1号墳の立地上の優位性が窺え、築造時期は1号墳に遅れると考えられる。

1号墳と3号墳の前後関係は、3号墳の詳細が不明のため明確でないが、過去の踏査記録では、3号墳で剣・ヨロイ等が出土したらしいことが記録されており、副葬遺物の内容から推定すれば、3号墳が1号墳に先行する可能性もある。以上から、東側支群では、まず、1号墳あるいは3号墳が築造され、その後、1号墳に遅れて11号墳が築造されたと考えられよう。

次に西側支群では、4・7・9号墳の3基が尾根稜線上に南北に列をなして立地し、ここから南に離れた尾根稜線上に南側支群の5・6号墳が立地する状況である。このうち、西側支群では、まず、円筒埴輪を有する7号墳（6世紀前半）が築造され、その後、4・9号墳が築造されたと考えられる。なお、4・9号墳の前後関係は明確にし難いが、4号墳は9号墳に比べて高所で眺望の利く場所に占地しており、床面標高も4号墳の方が1m程高いことから、4号墳が9号墳に先行して築造された可能性が高いと思われる。ただし、4号墳南東斜面下の5号横穴調査時に、4号墳からの流出遺物と推定される須恵質陶棺が出土しており、これが4号墳の初葬時に伴うものとするれば、あるいは9号墳に遅れる可能性もあろう。なお、南側支群の築造順位については推定の域をでないが、5号墳が円筒埴輪を有しており、まず、5号墳が築造された後、6号墳が築造された可能性がある。



第108图 堀切古墳群・横穴群主要出土遺物

以上、古墳の築造順位・動向を整理すると、以下の第Ⅰ期～第Ⅳ期の4つの画期で捉えることが可能である。

**第Ⅰ期：**西側支群の5号墳や7号墳等、埴輪を有する横穴式石室墳の築造を嚆矢として、古墳群の築造が開始される（6世紀前半）。

**第Ⅱ期：**第Ⅰ期から時期を隔てて、西側支群の4・9号墳、東側支群の1・11号墳が築造され、古墳群の最盛期を迎える。TK43～TK209型式期（6世紀後半～7世紀初頭）。第Ⅱ期末には、竜山石産凝灰岩製組合式家形石棺を安置した6号横穴が築造される。

**第Ⅲ期：**古墳の築造が停止され、替わって横穴築造の最盛期を迎える。TK217型式期（7世紀前半）。

**第Ⅳ期：**横穴の築造が停止される。ただし、10号横穴では銅製帯金具が出土する等、一部8世紀にかけても追葬が認められる（7世紀後半～8世紀）。

以上、当古墳群では、まず、第Ⅰ期の6世紀前半に、埴輪を有する横穴式石室墳が丘陵上に点在する形で築造され、以後、本格的に古墳築造が再開されるのは、第Ⅱ期の6世紀後半から7世紀初頭にかけてである。この時期には、大きく東側尾根と西側尾根に分かれて、2～3基を小支群とした古墳が短期間に併行して築造されており、当概期に堀切古墳群の最盛期を迎えると考えられる。また、現在までのところ、①TK217型式期の須恵器が出土する古墳が認められないこと、②横穴群中最古とみられる6号横穴にTK209型式期の須恵器が出土すること、③横穴内出土須恵器がTK217型式期を中心とすること等から、古墳築造最盛期のTK209型式期を境に古墳が減少し、第Ⅲ期のTK217型式期に古墳の築造が停止され、替わって、横穴築造の最盛期を迎えると想定できる。

なお、6号横穴のように、横穴内に組合式家形石棺を安置する等、横穴式石室墳に劣らない厚葬を行う例は、奈良県天理市龍王山古墳群12-C・22号横穴や11-D・61号横穴等でも確認されており、横穴式石室墳と横穴の被葬者間にそれほどの階層差は認め難いことが指摘されている<sup>44</sup>。当古墳群・横穴群においては、第Ⅲ期に古墳築造を停止し、第Ⅳ期には、古墳群の立地する同一丘陵を引き続き墓域として使用していることから、おそらくは、当古墳群の被葬者集団と同一系譜の集団が、新たな墓制の変化（規制）に伴い古墳築造停止を余儀なくされ、引き続き当地で横穴を築造したものと推察する。

⑤堀切古墳群の被葬者集団について ところで、堀切1号墳のように、石室全長が9mを超える大型横穴式石室墳は、京田辺市域では他に例がなく（9m以下では下司1号墳<sup>45</sup>の8.55mが最大）、南山城地域では、南山城最大の石室を有する城陽市黒土1号墳<sup>46</sup>（両袖式：石室全長9.5m、玄室長5.0m、同幅2.1～2.55m、羨道部長4.5m）、城陽市上大谷17号墳<sup>47</sup>（片袖式：石室全長9m、玄室長4m、同幅3.5m）、加茂町前栢2号墳<sup>48</sup>（両袖式：10.7m、玄室長5.1m、同幅1.4m、羨道幅1.2m）、同井手塚古墳<sup>49</sup>（片袖式：石室全長9.4m、玄室長4.8m、同幅1.8m、羨道幅1.2m）に確認できるのみであり、1号墳が南山城でも屈指の石室規模を誇る古墳である

古墳	墳形	規模	内部構造	石室主軸	床面構造	石室全長	石室規模	埋葬棺・出土遺物等
1号墳	円墳	径22	同軸式 横穴式石室	S24° E 南南東	玄室・羨道置土+散石 玄室内散石+円礫 石組略渠排水溝	9.3	玄室長4.6×奥室幅1.37 玄室高 (2.3) 羨道長4.7×幅1.1	組合式彩色石棺 (二上山白石) 馬具・鉄製武器・ガラス玉・須恵器 土師器・石棺に赤色顔料塗布
2号墳	自然地形							
3号墳	円墳		横穴式石室					伝コロイ・伝鉄製武器・伝須恵器等
4号墳	円墳	径20	横穴式石室	S18° E 南南東	玄室内置土か?		玄室幅 (1.2)	須恵質陶棺・須恵器等
5号墳	円墳		横穴式石室					円筒埴輪・須恵器等
6号墳	円墳							
7号墳	円墳	径15						円筒埴輪・形象埴輪・須恵器器台等
8号墳	(円墳)	径(16)						周辺で須恵器出土
9号墳	円墳	径(20)	同軸式? 横穴式石室	南西	玄室内置土+円礫 円礫に赤色顔料付着	5.2以上	玄室長 (3.5) 羨道長 (1.7)	板状石材による組合式彩色石棺 鉄刀・ガラス玉・須恵・須恵器等
10号墳	円墳							
11号墳	円墳	径20×22	横穴式石室	S39° E 南東	玄室内置土+貼床 平面形態・床面構造		玄室幅 (1.2)	土師質色甲形陶棺・須恵器
横穴			内部構造	開口方向		全長	玄室規模	埋葬棺・出土遺物等
1号横穴			横穴	北北西				伝須恵器
2号横穴			横穴	北北西				伝須恵器
3号横穴			横穴	北北西				伝須恵器・伝鉄刀1
4号横穴			横穴	東	平面とつくり形	残長2.96	奥室幅1.40、高1.54	直葬?、須恵器・鉄刀
5号横穴			横穴	東	平面とつくり形	残長4.6	奥室幅約2.0	直葬?、人骨1・須恵器・土師器
6号横穴			横穴	東	平面逆台形状 木炭灰+円礫	残長4.6	奥室幅2.6、高さ(2.1)	組合式彩色石棺(須上山石) 人骨1・変形1対・須恵器・土師器
7号横穴			横穴	南東	平面とつくり形?	残長2.15	奥室幅1.65	棺台石有(木棺)・土師器
8号横穴			横穴	南東	平面とつくり形	残長2.8	奥室幅1.0	棺台石有(木棺)・須恵器
9号横穴			横穴	南東	平面とつくり形	残長4.2	奥室幅1.5	棺台石有(木棺)・須恵器
10号横穴			横穴	南東	隅丸長方形	残長3.3	奥室幅1.65	棺台石有(木棺)・人骨2 赤色顔料の付着した石材有・鉄片 真鉄・銅製帯金具・須恵器・土師器

単位はm、括弧内は推定

表2 掘切古墳群・横穴群の諸要素一覧

ことがわかる。なお、内部に馬具・武器・ガラス玉・土器等の豊富な副葬品をはじめ、京都盆地では希少な二上山白石組合式家形石棺を安置していることは、1号墳の被葬者が他の周辺の群集墳の被葬者集団と比較して、より上位の階層に属していたことを示すものであり、堀切1号墳は当概期における堀切古墳群のみならず、周辺部をも含めた中心的古墳であったと想定できよう。

なお、京都盆地の二上山白石組合式家形石棺の出土状況を見ると、乙訓地域でも最大規模の石室を有する大型前方後円墳の物集女車塚古墳(MT85型式期)や、前方後円墳あるいは大型円墳と想定される今里大塚古墳(TK217型式期)に採用される一方で、北山城の音戸山5号墳(7世紀前半)や南山城の当古墳(TK209型式期)のように、丘陵部の群集墳内の中心的古墳に採用されており、墳形や墳丘規模に関わらず広範な分布が認められるようである。

こうした状況は大和においても看取でき、奈良県天理市東乗鞍古墳<sup>91)</sup>(全長72m)や桜井市珠城山1号墳<sup>92)</sup>(全長50m)、生駒郡平群町烏土塚古墳<sup>93)</sup>(全長60m)等の大型前方後円墳に二上山白石組合式家形石棺が採用される一方、天理市龍王山古墳群<sup>94)</sup>C-1号墳(石室全長12.8m)やH-1号墳(石室全長9.2m)等の群集墳内の大型古墳にも同種の組合式家形石棺が採用されており、この点に関して、大型前方後円墳と群集墳内の中心的古墳との間に紐帯関係が想定されている<sup>95)</sup>。

南山城では、上記大型首長墳と群集墳内の古墳とは出土遺物の時期が異なるため、大型首長墳と群集墳内の中心的古墳との間に直接的な紐帯関係は認め難いが、少なくとも、堀切1号墳において、京都盆地で主体をなす竜山石を採用せず、希少な二上山白石を採用していることは、二上山白石組合式石棺という規格性の強い石材を管理・掌握する立場にあったと推測される、中央政権(飛鳥)との密接な関連性を示唆したものと見えよう。

このように考えると、堀切1号墳の被葬者は、単に当古墳群周辺を掌握する立場にあった人物にとどまらず、より広範な地域あるいは集団を掌握する立場にあった男性首長<sup>96)</sup>で、しかも中央政権と密接な関係にあった人物と想定することが可能であろう。被葬者集団の社会的階層や性格の解明については、今後、さらに内部構造や副葬遺物を含めて、より広範な地域との比較を行った上での検討作業が必要であろう。被葬者集団の集落跡が予想される薪遺跡の調査も含めて、今後の調査・研究に期待したい。

## 【註】

- 1) 田辺郷土史会編『京都府田辺町史』田辺町 1968
- 2) (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター『新遺跡第7次現地説明会資料』2006
- 3) 西田直二郎『洛南大住村史』1951、

大隅華人に関しては、『日本書紀』天武14年条に、「大倭連、葛城連、凡川内連、山背連、難波連、紀酒人連、倭漢連、河内漢連、秦連、大隅直、書直、並びに十一氏に姓を賜ひて忌寸と日み」という屬姓記事が確認でき、天武朝に既に畿内において華人が居住していたことが窺える。また、同じく『日本書紀』天武11年条に「華人多く來たり、方物を貢す。是日、大隅華人、阿多華人朝廷に相撰す」等、華人に関する記載がみられる。さらに、『正倉院文書』の国都未詳の華人計帳の断簡が、大住郷に相当することが明らか

にされており、京田辺市大住地区が畿内華人の最大の居住地の一つであると考えられるに至った。

- 4) 田辺郷土史会編『田辺町郷土史・古代篇』1959
- 5) 高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1969
- 6) 池田次郎「法貴B1号墳および堀切六号横穴の改葬人骨と近畿におけるその類型」『権原考古学研究所論集』第12集 吉川弘文館 1994
- 7) 林正・吉村正親・西川滋「京都府田辺町堀切古墳群調査報告書」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第11集 田辺町教育委員会 1989
- 8) (財)京都市埋蔵文化財研究所「大枝山古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第8冊 1989
- 9) 上原真人「御堂ヶ池群集墳第20号墳発掘調査報告」六勝寺研究会 1973
- 10) なお、漢道部左御壘から南東方向に延びる溝状の擾乱は、大正期石材採取時の盗掘坑兼石材搬出路と考えられる。この溝状擾乱の延長線上の墳丘東側斜面では、石材の重みで生じたと推定できる窪みが随所に見られることから、採取した石材は搬出路から東側斜面に向けて転げ落とされ、搬出されたと推察する。なお、玄室奥壁背後の溝状擾乱は、天井石をスライドさせて抜き取った際の作業道と思われるが、石室内流入土の堆積状況から、天井石に関しては、大正期石材採取以前にすでに抜き取られていた可能性が高い。
- 11) 奈良県天理市ハマ塚古墳では、玄室敷石上に白色及び黒色のバラスを多量に敷き詰めており、これに関して道敷や陰陽道との関連性が指摘されている。また、京都府城陽市黒土1号墳では、玄室内から白雲母片が出土しており、葬送に際して白雲母片を撒いたと想定されている。当古墳玄室敷石には、黒色のホルンフェルス等に混じって、1点のみ石棺材と同種の二上山白石凝灰岩を使用しており、黒の中に白を意識して石材を据え置く意図があったと考えられ、当時の葬送儀礼等を考える上で興味深い。
- 12) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「女谷・荒坂横穴群 本文編・図版編」『京都府道跡調査報告書』第34集 2004
- 13) 京都府立山城郷土資料館 橋本清一氏の御教示による。
- 14) 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所「音戸山古墳群発掘調査概報」1983  
音戸山5号墳は、無袖式横穴式石室を有する径約15mの円墳で、古墳群中では唯一組合式家形石棺が出土した古墳である。7世紀前半に比定される。
- 15) 秋山浩三・山中幸福「物業女塚古墳」『向日市文化財調査報告書』第23集 向日市教育委員会 1988  
全長48mの前方後円墳で、玄室長5m、羨道長5.8mの右肩袖式横穴式石室を有する。TK10~TK209型式期の須恵器が出土しており、初葬は6世紀中頃と考えられる。
- 16) (財)長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成11年度」2001  
今里大塚古墳は、径45mの円墳あるいは前方後円墳と考えられ、玄室長5.5m以上、羨道長7.5mの山城地域でも最大級の規模の横穴式石室を有している。TK217型式期の須恵器が出土しており、概ね7世紀前半に比定される。乙測地域最後の大形首長墳と考えられる。
- 17) 板杖棺蓋を有し、棺身長側肩部が複数毎で構成され、左右各辺の石材数が異なる組合式家形石棺の例は、奈良県桜井市珠城山1号墳棺(二上山白石)にも認められる。
- 18) 河上淳彦編「史跡牧野古墳」『広陵町文化財調査報告』第1冊 広陵町教育委員会 1987
- 19) 15) に同じ
- 20) 18) に同じ
- 21) 田辺町教育委員会「宮の口4号墳発掘調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第20集 1995  
なお、京田辺市域では、堀切4号墳と下司1号墳(四注式屋根形陶棺)で須恵質陶棺が出土している。
- 22) 山田良三「伊勢田塚陶棺発掘調査報告書」伊勢田塚調査会 1973
- 23) 宇治市教育委員会「菟道門ノ前古墳・菟道跡跡発掘調査報告書」『宇治市文化財調査報告』第5冊 1998
- 24) 平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」『京都考古』第14号 京都考古刊行会 1975
- 25) 小江康雄「京都府久世郡城陽町青谷出土の陶棺について」『京都学芸大学学報』1952
- 26) 久保哲正「京都府井手町平山古墳発掘調査概報」『井手町文化財調査報告』第2集 井手町教育委員会 1987
- 27) 精華町史編纂委員会編「精華町史 史料編Ⅰ・本文編」精華町 1989・1996
- 28) 南山城の陶棺が主に横穴式石室内に安置され、一方の北大和の陶棺が横穴内に安置されている点から、南山城の陶棺被葬者は、北大和の陶棺被葬者層より上位の階層に採用された棺との指摘がある。  
精華町史編纂委員会編「精華町史 史料編Ⅰ・本文編」精華町 1989・1996
- 29) なお、北大和・南山城をはじめ畿内の土師質亀甲形陶棺は、棺身・棺蓋部外表面の突帯により、主に方形

の網目状に区画されるのが特徴であり、区画形状と突帯間区画の段数等による分類から、すでに詳細な型式分類と編年が行われている。

- 30) 棺身・棺蓋ともに3段以上に区画される例は、南山城では宇治市伊勢塚古墳のみに認められる。なお、畿内最古の須恵質陶棺と思われ、大阪府豊中市桜井谷古窯産と考えられる中井山3号墳棺(6世紀末頃)は、土師質亀甲形陶棺の形態を持ちながらも、①棺内・外面にタタキ技法が採用され、脚部がロクロ成形成される。②棺蓋・棺身ともに中央に切面がみられない等、須恵質陶棺の成形技法の特徴を有している。堀切11号墳棺は、上記②に関しては不明だが、①の特徴のうち、タタキ技法を採用しているのは間違いなく、須恵質陶棺の製作工人との技術的な関連性を窺うことができよう。南山城でも京田辺市は、畿内最大の土師質亀甲形陶棺分布地である北大和に近接しており、また畿内最大の須恵質四柱式陶棺分布地である大阪府豊中市に近接し須恵質陶棺の密集地域である乙訓地域にも近い。先述の中井山3号墳棺は、奈良市歌郷1号横穴や井手町平山古墳出土の土師質亀甲形陶棺との形態的・技術的共通点が多いことが指摘されており、いずれも中井山3号墳棺に先行することから、中井山3号墳棺を含めた桜井谷古窯群の須恵質陶棺は、北大和・南山城の土師質亀甲形陶棺の技術的影響の下で製作されたと考えられている。  
豊中市教育委員会「地下に眠る歴史[3](豊中の陶棺)」『文化財ニュース豊中』No.32 2004
- 31) 森下浩行「土師質亀甲形陶棺小考—北大和・南山城を中心に」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1993』奈良市教育委員会 1994
- 32) 木村康彦・吉岡博之「山城地方出土陶棺集成」『長岡京路発掘調査研究所調査報告書』第1集 1979
- 33) 15) 物業女塚古墳陶棺は、左右各5突起、3枚蓋で構成される板状棺蓋をもつ組合式家形石棺で、棺蓋上部平坦面幅の広い板状棺蓋を有する点や、棺蓋が複数枚で構成される点、短側辺部が長側辺部を挟み込む形式である点、また棺蓋内面外縁部に段を有する等の点が類似する。ただし、棺身長側辺部が1枚で構成されている点や棺構成材がやや厚手である等の点が異なる。
- 34) 京都府教育委員会「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1976
- 35) 詳細な数値は得られないものの、棺蓋斜面部の水平面幅7cmを左右に折り返し、棺蓋幅を0.8~1.0mと推定して棺蓋上部平坦面幅指数(上部平坦面/蓋幅×100)を推定すると、75~86となる。
- 36) 増田一裕「畿内系家形石棺に関する一考察(上・下)」『古代学研究』83~84 古代学研究会 1977  
増田一裕「家形石棺の基礎的分析(上・中・下)」『古代学研究』162~164 古代学研究会 2003~2004
- 37) 15) 及び安藤信策「山城の石棺」『京都考古』第15号 京都考古刊行会 1975  
なお、突起を除いた諸特徴を比較するならば、大阪府東大阪市山畑古墳群を中心に河内東部を中心に分布する、いわゆる「山畑型」組合式家形石棺に形態が類似しており、この中でも、特に山畑8号墳棺(二上山白石?)と八尾市高安大塚棺(二上山白石)は、棺蓋部斜面部幅が7.0cm前後で、蓋部内面に段が巡ることや、棺各部の構成材が薄手で複数枚で構成される等、1号墳棺に類似した特徴を有している。
- 38) 16) に同じ
- 39) 14) に同じ
- 40) 4号墳は、20mの円墳に8mの前方部が取り付く全長28mの前方後円墳の可能性も指摘されている(註7)が、前方後円墳とするには根拠が乏しく、円墳の可能性が高いと考える。
- 41) 河上邦彦「龍王山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第68冊 奈良県立橿原考古学研究所 1993
- 42) 辰巳和弘・山田邦和・勲桐俊夫ほか「下司古墳群」同志社大学校地学術調査委員会 1985
- 43) 城陽市教育委員会「城陽市埋蔵文化財調査報告書」第40集 2001
- 44) 内田真雄「付論 南山城における後期古墳の概観」中島正福「神童子稲葉古墳群」『京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 山城町教育委員会 2001
- 45) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「前門2号墳古墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』2 1982
- 46) 44) に同じ
- 47) 佐藤小吉「東乗鞍ノ古墳・権現堂古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』3 1916
- 48) 小島俊次・伊達宗泰「大和国磯城郡大三輪町穴師 珠城山古墳」奈良県教育委員会 1956
- 49) 伊達宗泰・岡幸二郎・菅谷文則「鳥土塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第27冊 奈良県教育委員会 1972
- 50) 41) ここでは、C-3号墳(石室全長12.8m)やH-1号墳(石室全長9.2m)等の群集墳内でも大型円墳に石棺を多用する傾向がみられ、また、規模の大きい横穴にも凝灰岩製石棺が安置されている。このうち、H-1号墳石室は、全長9.2m、支室長4.6m、支室奥壁幅2.1m、羨道部長4.6m、支室幅1.1mをはかり、堀

切1号墳とはほぼ同一規格で設計されている点は注目される。

- 51) 間原忠彦・間原茂子・山本雅靖「石棺研究ノート」『倉敷考古館研究集報』倉敷考古館 9号～12号  
1974～1976
- 52) 藤・甲冑及び鉄形石は基本的に男性被葬者に副葬され、女性には副葬されないことが指摘されている。  
清家 章「副葬品と被葬者の性別」福永伸哉・杉井健編『雪野山古墳の研究』八日市教育委員会 1996

## 【参考文献】

- ・田辺郷土史会編『田辺郷土史・古代篇』1959
- ・田辺郷土史会編『京都府田辺町史』田辺町 1968
- ・高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1969
- ・平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」『京都考古』第14号 京都考古刊行会 1975
- ・安藤信策「山城の石棺」『京都考古』第15号 京都考古刊行会 1975
- ・森浩一「近畿地方の華人」（大林太良編『日本古代文化の探求 華人』1975
- ・林正史「京都府堀切古墳群及び横穴群」『日本考古学年報』31 1978
- ・吉岡博之・木村康彦「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所 1979
- ・奥村清一郎「南山城の横穴」『京都考古』第27号 京都考古刊行会 1982
- ・林正・吉村正義・西川滋「京都府田辺町堀切古墳群調査報告書」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第11集 田辺町教育委員会 1989
- ・高橋美久二「堀切古墳と古墳の時代」『薪誌』pp.99-115. 1991
- ・田辺町教育委員会「京都府田辺町遺跡地図」1995
- ・京都府教育委員会「京都府遺跡地図（第3版）」第3分冊 2003
- ・京都府埋蔵文化財研究会編『京都の首長墳』第8回埋蔵文化財研究会発表資料集 2000
- ・京田辺市教育委員会「新遺跡発掘調査概報」『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集 2000
- ・同志社大学校地学術調査委員会編「古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集 1980
- ・京都大学考古学研究会編『畿内野の古墳時代』京都大学考古学研究会出版事務局 1971
- ・千賀久「馬具」『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ副葬品』1991
- ・白石太一郎「大型古墳と群集墳—群集墳の形成と同族系譜の成立—」『考古学論攷』第2冊 権原考古学研究所 1973
- ・小野山節「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑』第1巻古代上 日本中央競馬会 1990
- ・河上邦彦他「平群・三里古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第33冊
- ・森下浩行「土師質亀甲形陶棺小考—北大和・南山城を中心に—」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1993』奈良市教育委員会 1994
- ・白石勝治「畿内における陶棺研究序論」『西谷眞治先生古稀記念論文集』勉誠社 1995
- ・宮本康治「堂山3号墳出土陶棺の位置付けとその系譜」『堂山古墳群』大阪府文化財調査報告書 第45冊 1994
- ・橋本惣司・村上幸雄「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』26-2 考古学研究会 1979
- ・帝塚山考古学研究所編「横穴式石室を考える—近畿の横穴式石室とその系譜—」1990
- ・田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- ・田中一廣「大和・巨勢山古墳群の群葬造と性格（一）」『花園学』第8号 花園大学史学会 1987
- ・和田晴吾「畿内の家形石棺」『史林』59-3 史学研究会 1976
- ・藤下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』第111号 古代学研究会 1986
- ・中島正「神童子稲葉古墳群」『京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 山城町教育委員会 2001
- ・青木敏「古墳築造の研究—墳丘からみた古墳の地域性—」有限会社六一書房 2003
- ・清家章「横穴式石室導入期前後の親族構造と女性家長」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科 2004
- ・古代の土器研究会編『古代の土器5-2 7世紀の土器（近畿西部編）』1998
- ・高田寛太「古墳副葬鉄銚の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会 1998
- ・大阪大学文学研究科編「井ノ内稲荷塚古墳の研究」『大阪大学文学研究科考古学研究报告』第3冊 2005



## 附篇 堀切1号墳横穴式石室の石材材質

橋本清一

1. はじめに 堀切古墳群は、約150万年前の大阪層群下部の砂混じり砂礫層から成る淡水の大河川性堆積物であり、未固結の為、浸食が激しく小谷が形成されやすく、やせ尾根となる丘陵地形を呈する。1号墳は、丘陵のやせ尾根上に、築成されている。

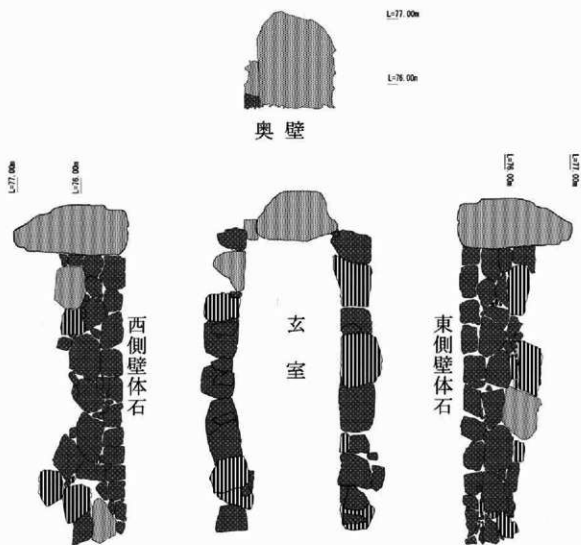
今回の発掘調査によって検出された1号墳の横穴式石室の石材について、各石材の岩石名・寸法・円磨度・風化度・その他の特徴を調べた。1号墳の西側を北流する手原川の現河床礫を測定し、源流の甘南備山とその周囲の地質調査を行い、1号墳の石室石材の採取地を推定した。

2. 石室の壁体石の石材材質 各石材の測定方法は、橋本(1993)、Krumbein(1941)による。岩石名の分布図は、第1図に、各測定項目の結果を第2図に示す。奥壁は、長径185cm、中径125cm、短径40cmの巨石である。円磨度は、0.2と角ばっており、風化度は、新鮮～弱風化であり風化していない。長石、石英の軽鉱物が多く、黒雲母がみられるが風化が進んでいる。平均粒径は、約7mmであり、部分的に20mm程度の長石が斑状にあり少し目立つのと、やや弱い片麻状構造がみられるがわかりにくい。

両側の壁体石は、堇青石を含むホルンフェルスが60%強であり、花崗岩類と珪岩を含むチャートが40%未満である。3軸単純平均径は、60～40cm程度のものが主に使われ、裏込め石は40～20cm程度のものが使われている。壁体石の円磨度は、岩石名により若干異なるが、0.2の極めて角ばったものから、0.5程度のやや円磨されたものまでである。風化度は、ほとんどが新鮮であり、弱風化に近いものも少しみられる。

3. 石室(玄室)の敷石の礫の材質 玄室内の敷石は、上層の敷石を測定し、第3図に示す。岩石名は、ホルンフェルスが約83%で、珪岩・チャート・脈石英が約17%で、稀に石棺材と考えられる二上層群下部ドンゾルボー層の白色の凝灰岩片がみられる。3軸単純平均径は、15～35cm程度の範囲内の寸法である。円磨度は、岩石名により分布が少し異なるが、0.2～0.6までの角ばったものからやや円磨が進んだものまでである。風化度は、凝灰岩を除くと、ほとんど新鮮であり、弱風化に近いものも少しある。

4. 現河床礫の測定と、礫の採取地域の推定 木津川の支流である手原川とその支流は、甘南備山を源流とする全長約5kmで北流する短い河川である。河川改修が進み、深く掘削し、コンクリートで固められ、他から持ち込まれた礫が入れているため、現河床礫が全くみられない。しかし偶然に、手原川と舞ヶ辻川との合流点近くの掘削地で、本来の現河床礫を測定できた。岩石名はホルンフェルスが約81%であり、珪岩・チャート・脈石英が約19%である。3軸単純平均径は、狭い採取地の関係で、20cm以下と小さい。円磨度は、岩石によって分布が



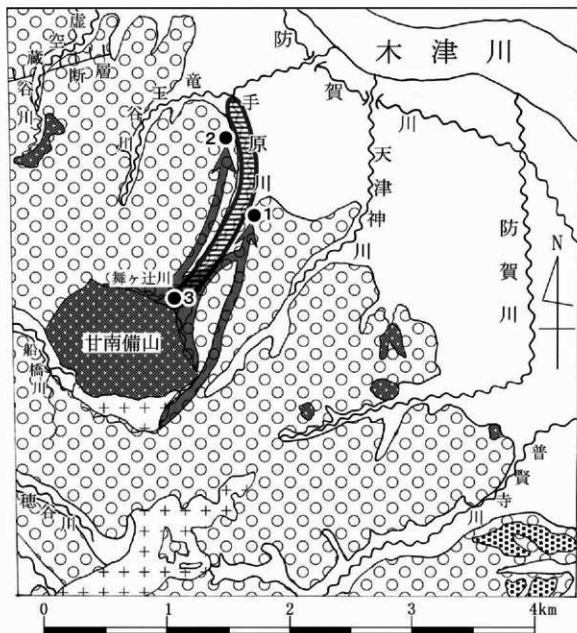
凡 例	
チャート :CH(珪岩を含む)	花崗岩類 :GR (黒雲母花崗岩 花崗斑岩 片麻状花崗岩)
■ ホルンフェルス(泥質) :HFSH	

第1図 堀切1号墳横穴式石室の岩石名分布図









● 1：堀切1号墳 ● 2：郷土塚古墳群 ● 3：現河床礫測定地点



第5図 古墳の石材の採取地域の推定図

少し異なるが、0.2～0.6までみられる。風化度は、ほとんどが新鮮であり、弱風化に近いものが少しみられる。(第4図)

手原川の礫に対して、木津川本流の手原川合流点付近の礫は、岩石名がもっと多くなるのと円磨が進んでいるものが多いため、明確に異なる。そのことから、玄室内の礫床の礫は、手原川の当時の河床礫を採取したと考えられる。

**5. 壁体石等の採取地域の推定** 甘南備山は、長さ1.3km、幅0.7kmの山地で、その90%がホルンフェルスであり、珪岩、チャート、脈石英が所々に挟まれるように分布する。甘南備山の南端10%は、花崗岩が分布する。花崗岩は、分布地域が狭く、その東側と西側では、やや風化が進んでマサ土化が進んでおり、巨石はほとんどみられない。しかし南端では巨石が所々にみられる。甘南備山の花崗岩は黒雲母花崗岩であり、平均粒径は約7mmで、部分的に10～20mm程度の長石が斑状に見えるのと、他の地点ではやや弱い片麻状構造が不明瞭だがみられることもある。

堀切古墳群周辺にホルンフェルスは、防賀川と虚空蔵谷川の上流には、0.1～0.5km程度の範囲に分布するが、分布域が極めて狭いのと、露頭条件の悪さや、良好な大きさや質と量が得にくいことから1号墳へは運搬されていないと考えられる。1号墳の重晶石を含むホルンフェルス・珪岩・チャート・脈石英は甘南備山の山中の崖下の転落石や、手原川の甘南備山中の数本の溪流や谷川内の河床礫を運搬したと考えられる。

奥壁の巨石の花崗岩は、岩石学的な特徴や分布状況から、甘南備山の南部に分布する花崗岩であり、しかもその南端付近で採取し運搬したと考えられる。壁体石の花崗岩も甘南備山の南部から広く採取したと考えられる。

このように、堀切1号墳の玄室の奥壁、壁体石と石敷の礫は、甘南備山山中の崖下の転落石や数本の溪流や谷川内の河床礫と手原川の更に下流の広範囲の河床礫を採取したと考えられる。また京田辺市立中央公民館の裏庭にある郷土塚古墳群出土の1.6m角の巨石はホルンフェルスで、円磨されず角ばっているため、甘南備山山中の崖下の転落石を採取したと考えられる。(第5図)

#### 参考文献

- 橋本清一 1993「古墳群の材質研究」『考古学と自然科学』第28号 日本文化財科学会 pp.25-44.  
Krumbein, W.C. 1941; Measurement and geological significance of shape and roundness of sedimentary particles, *Journal of Sedimentary Petrology*, Vol.11, No.2, pp.64-72.  
西川美弘 1981「郷土塚古墳群試掘調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第2集 pp.33-37.  
田辺町教育委員会 1989「京都府田辺町 堀切古墳群調査報告書」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第11集 pp.1-34.  
石井清司 1985「田辺町郷土塚4号墳の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第18号 pp.6-12.  
高橋美久二 1991「堀切古墳と古墳の時代」『新誌』pp.99-115.

## 報告書抄録

ふりがな	ほりきりこふんぐんはくつちょうさほうこくしょ2							
書名	堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ							
副書名	薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	第36集							
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	鷹野一太郎・橋本清一・島軒 満							
編集機関	安西工業株式会社							
所在地	〒651-2411 兵庫県神戸市西区新地3丁目3番1							
発行年月日	2006年6月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
堀切古墳群 (1・2・ 11号墳)	京都府 京田辺市 薪堀切谷 9-8,10,11-1 薪里ノ内 111-1,114-1	26211		34°	135°	2005年	2,000	宅地造成工 事に伴う発 掘調査
				49°	45°	5月27日		
				11°	19°	～ 10月28日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
堀切古墳群 (1・2・ 11号墳)	古墳	古墳時代 後期、古 代～中・ 近世	群集墳 (横穴式 石室)	須恵器・土師器・瓦器・ 陶磁器、武器(鉄鎌・ 鉄鉾・石突・刀子)、 馬具(雲珠・轡等)、ガ ラス玉、二上山産凝灰 岩製組合式家形石棺、 土師質亀甲形陶棺、銭 貨等		横穴式石室を内部主体とする古墳 時代後期後半の円墳2基を確認。 1号墳は径約22mで、全長約9.3 mの両袖式横穴式石室をもつ。玄 室内から二上山産凝灰岩製組合式 家形石棺等が出土。11号墳は径 20×22mの円墳で、玄室内から 土師質亀甲形陶棺片が出土。		



平成 18 年 6 月 29 日 印刷

平成 18 年 6 月 30 日 発行

## 堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ

— 藪塚切谷・里ノ内地内宅地開発造成工事に伴う発掘調査報告書 —

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第 36 集)

発 行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺 80 番地

電話 0774-62-9550

編 集 安西工業株式会社 発掘調査部

〒651-2411 兵庫県神戸市西区新地 3 丁目 3 番 1

電話 078-967-5530

印 刷 あゆみコーポレーション

〒550-0003 大阪府大阪市西区京町堀 1-12-14

電話 06-6441-4918